

第 II 章

座 談 会

Part. 1



日セフ連50年史を制作するにあたり2014年9月、東京・霞が関の霞山会館で熊平雅人会長と7副会長が出席する座談会を開催した。

日セフ連の過去50年の足跡や現況、さらにはこれからの展開、抱負等をそれぞれの立場で語って頂いた。各5地区の組合はいずれも金庫製品の販売伸び悩み、会員社の減少、厳しい財政などの状況に突き当たっている。しかし、次の50年、100年の組合活動を展開すべく熱のこもるお話をうかがうことができた。

成熟産業の課題を 「システム化」で飛躍



50年の足跡を振り返り、今後の課題語り合う

【出席者】

- 会 長** 熊平雅人 (株)クマヒラ・(株)熊平製作所 代表取締役会長)
- 副会長** 内記政春 (大阪セーフ・ファニチュア協組理事長／(株)ナイキ 代表取締役社長)
- 川村 正 (中部セーフ・ファニチュア協組理事長／(株)ヤマニ商会 代表取締役社長)
- 諏訪正照 (中国セーフ・ファニチュア協組理事長／(株)熊平製作所 代表取締役社長)
- 柿木秀嗣 (大阪セーフ・ファニチュア協組理事長／(株)イトーキ 執行役員 関西工場長)
- 中村 匠 (東京セーフ・ファニチュア協組理事長／(株)サガワ 代表取締役社長)
- 角野博司 (東京セーフ・ファニチュア協組副理事長／(株)クマヒラ 代表取締役社長)
- 田中稔彦 (九州セーフ・ファニチュア協組理事長／金剛(株) 代表取締役社長)

(敬称略、所属、役職は9月の座談会実施当時のものです)

— 本日はご多忙のなかお集まり頂き、ありがとうございます。日セフ連50年史を編集・制作するにあたり、会長・副会長の座談会を開催いたします。日セフ連は平成27年に50年目の節目を迎えます。皆様の活発な意見、お話をうかがい、この座談会の内容を掲載することとは30年後、50年後の日セフ連の道標になることと思います。セーフ・ファニチュア産業を夢と希望と情熱あふれる産業にするために、建設的なお話を賜りたいと思います。

熊平 まず、会長という立場から口火を切りたいと思います。個人的な話を



含んでの話になります。日セフ連は昭和40年に設立され、平成27年で50年目を迎えます。昭和40年は私が大学を卒業して会社に入った年で勤続50年を迎える。このように私は日セフ連と同じ歩みをもつという縁を持っている。

初代会長は私の伯父にあたる熊平製作所代表の熊平清一が、昭和59年まで21年間務めた。私の前任者のイトーキの伊藤七郎氏が7年間務められた。私が会長に就任して来年で15年目になります。全くの奇遇ですが、そうした意味からも、個人的にも日セフ連の歩みとは非常に縁の深さを感じます。日セフ連の設立50年と私の会社勤続50年、日セフ連会長を務めて14年ということを考えますと感慨深いものがあります。

— 会長が50年という数字を示されました。日セフ連の歩みを紐解きますと、平成元年に東京、中部、大阪、広島 の4組合、翌平成2年に福岡の組合が認可されました。日セフ連がスタートしたわけですが、設立50年を迎えての皆さんの感想、感慨をお聞かせください。

内記 設立50周年を迎えて感じますことは、日セフ連という語句が出ると、私は親父がそこにいるような気がするのです。親父は初めに大阪金庫組合に入り、その後、日セフ連にお世話になってきた。大阪セーフ組合と日セフ連は親子のような関係ですが、父と私は長い間この団体にお世話になってきました。さまざまな催事や行事に触れるたびに私はホッとする気持ちにな

懇親会、親睦会で人の輪広がる

る。故郷のような、安らぐ気持ちになる。父もきつと同じ気持ちだったと思います。

地区組合では毎年、行事や総会等の計画を立てたり、ゴルフや旅行会等、いろいろな形の催事を行っています。金庫というものを通じて、親睦を積み重ねることによって人の輪ができ、広がっている。本当にありがたいと思っています。組合行事は仕事をしながら、思い出づくりができる会でもある。先輩の方々の想いが脈々と流れる中に、私がいることを感じています。日セフ連の50年の歴史には、積み重ねてきた重みがあると感じています。

諏訪 日セフ連は50年を迎えるわけですが、50年前と現在とでは、その活動が変わっているものと、変わっていないものと、また活動自体は変わっていないが、その中身が変化しているものがあると思います。そこで、50年前の設立時にどのような活動をしていたか調べてみました。

設立当時は業界全体として、従業員の募集をしていました。業界をあげて、よりよい人材を集めようとしていたと思われます。また商品の展示を行い、即売会なども実施していました。これらは、現在行っ

いない活動です。

活動の中身が変化してきたものとしては、製品の基準があげられます。例えば、JISや金庫設備試験規格などは、業界として、ルールを設定し、運用し、必要に応じて変更してきました。また設立当時から、金庫に関する知識を深めるための教育を実施していました。今は金庫診断士という資格制度に変わっています。広報もホームページを活用して行われるようになっていきます。このように50年前とは方法は違っても踏襲して実施しているものもあります。

50年前と同様に行っているものとしては、福利厚生や懇親会があげられます。設立当時から講演会やゴルフコンペや懇親会などは実施していました。これらは、情報交換や懇親を深めるものとしては有効なものだと思います。

今後の日セフ連は、懇親会など楽しい行事を続けていけばよいし、また世の中の変化に伴ってJISなどの性能の規定も変更していけばよいと思います。どちらにしてもこの業界の日セフ連が50年続いていることは、素晴らしいことですし、今後もずっと続いてほしいと思います。

日セフ連参加でサービス向上、販売が容易に

中村 50年の歴史は重いと思うが、個人的には14年前の総会に、初めて参加したのが日セフ連との接点です。私自身の話というよりも祖父、父、私と3代にわたって、日セフ連に関わらせて頂いたことを非常に重く感じています。諏訪副会長が言われたように、時代に即した形でのこの50年間、日セフ連が業界活性化のためにさまざまな尽力をし、新しい施策を打ったりしてきました。JIS規格に関しては、その時々に応じて必要な改正を行ってきた。あるいは、金庫診断士といった資格を創設することによって、業界全体の活性化を目指してきた流れがある。先達の方々が積み上げてきた50年は非常に重いものがあると思います。私も今、地区組合を含めての話ですが、日セフ連の活性化の一助になるよう努力をしていくという志を持っているし、また50周年を契機に全体がさらに盛り上がっていきけるような流れを作っていきたいと思っています。

角野 50年という年月は半世紀になり、重みを感じます。私は昭和48年に入社して、42年ほどこの仕事に携わっていることになる。その当時は社員の目で日セフ連を見ていた。先ほど皆さんが言われていたように、親睦目的というイメージが強かったと思う。実際の活

動というのは社員の立場からは理解できなかった。年月が経ち、いざ役員をさせて頂くと、時代と共に活動というものの大切さが非常に重要になってきていることがわかってきた。ただ、社会の変化というものが今後、非常に激しいと思いますので、その意味ではこの50年という半世紀が節目になって、次の50年を目指してどのようにギアチェンジをしていくのが問われてくるのではないかと思います。

田中 個人的なことですが、私自身は全く別の業界から平成20年にこの業界に転職してきました。副会長の職に就いたのが平成24年です。日セフ連の歴史に比べるとまだまだ知識、経験は不足しています。それだけに日セフ連の皆さんと活動を共にする中で、その歴史の重さと我々が社会から要求されている責任の大きさを大変強く感じています。

柿木 私は日セフ連と関わるようになってから満4年、足かけ5年目になる。皆さんと違い、なかなか古くからこの状況がわかっているのかという点で厳しく、理解し難いところもあります。そういうことです。昔はどうだったというコメントは申し上げられないので



すが、この4年間、技術委員会などの報告を聞いてみると、やはり安心・安全の日本のスタンダードを作り上げてきていることを感じています。たぶん戦後、欧米のいろいろな規格等々のマネをしながら成長をしてきたと思いますが、やはり日本も今よりも大きくなって、当然ながらグローバルなスタンダード、日本が決めたさまざまな規格・基準が世界で通用するような形にしていきたいと考えます。これに50年という長いスパンをかけるつもりはありませんが、極力そういうものを日セフ連が5年、10年の間に世界で通用するような組織になつてほしいと思っています。

川村 私は5歳の時に伊勢湾台風というすごい災害を体験しました。その時、祖父や父に金庫が流されたという話を聞いている。未だに当時の金庫を持ち、利用しているお客様がいて、涙が出るほどありがたいことと思ってい

ます。その我が家の歴史を顧みると祖父、父、私と3代にわたって金庫屋を営んできました。中部地方の後継者が営む会社数社が集まり、双葉会という親睦会をつくりました。その後、一番ありがたかったのは日セフ連ができたことで、物流や全国的な組織のサービス向上で、販売が容易になった。販売についても、修理から防犯カメラなどのセキュリティへと、金庫屋だけでなくソフトも踏まえた全般的な物流ができたことで、販売に力を入れることができた。

中部組合は昭和13年に金庫商業組合として名古屋で発足しました。最初に販売したのは金庫屋ではなくて、岡谷鋼機という大手の商社でした。メーカーとしては鍋野金庫という企業がメーカーとしてのスタートでした。その人に手探り状況での修理方法を教示して頂きました。今でも大変感謝しています。我々の組合としては、日セフ連を通して物流や修理、販売に注力することができた。今、日セフ連は金庫の入れ替え、耐用年数20年をうたっていますので、名古屋も販売促進に力を入れて参りたいと思います。

―会長、副会長に就任されて、いろいろな活動をされてきました。そのなかで印象深い事柄はたくさんあ

ると思いますが、いくつか抽出してお聞かせください。

熊平 団体が昭和40年にできた時は、日本金庫鋼鉄家具商工業協同組合連合会という名称でした。それが平成元年に日本セーフ・ファニチュア協同組合連合会と改称した。通称、日セフ連と呼称していますが、平成と共に始まり、今日に至っている。この歴史の中で印象に残っていることは、イトーキの伊藤七郎氏が会長の時に米国に視察団を出したことがあった。この視察団には多数の会社に参加された。私の知る限り、組合としては初めての海外視察であったと思います。それが印象に残っています。その後、平成18年にドイツ・ケルンのオルガテックに私が団長になって海外視察を行った。それも強く印象に残っています。

2015年で私は会長に就任して15年目を迎えます。鋼製家具業界には日本オフィス家具協会（JOIFA）という団体があり、日セフ連会員にもJOIFA会員が大勢入会されている。こうした他業界団体と比べ日セフ連は小規模かもしれませんが、温かみのある誰かが親しめる団体だと自負しています。特別なことをしなくても、皆さんが集まるだけでホッと安らぎを覚えるような、雰囲気を感じられる団体だという印象

を抱いています。

内記 私もすでに7年ほど大阪組合の理事長を務めています。大阪組合は催事や行事に参加することが当然



のようにとらえています。大阪人は商売に厳しく、損得ということに対して大変シビアな感覚を持っていますが、そうしたことを抜きにして組合を皆で盛り立てていくという雰囲気がある。

大阪組合の歴史を振り返ると、大正時代に大阪にあった16の金庫屋さんが集まって、大阪金庫有志会という会を結成したことからスタートしました。はじめは親睦目的の旅行会を行った。その名称は今も語り継がれる「大金会」です。温かい友好を深めようというのが当初の目的でした。それがよかったようです。

その一方で昭和2年、ご真影奉安箱の特許権侵害の提訴問題が台湾の業者から出た。

アットホームでハートフルな組織

当時のイトーキ社長がそうした問題は1業者だけの問題ではないと応訴を決議、証拠データの収集に走り回りました。応訴した業者たちが昭和2年に大阪金庫業組合を発足しました。裁判は勝訴して、これを機に組合を設立した経緯があります。ですから、問題が起きて、会員が結束することで裁判に勝った。団結することの良い結果を得た。損得で集まったのではなく、皆の力を結集することで危機を乗り越えた。

はじめは親睦目的で集まった組合だが、商売の損得ではなく、組合員全員で業界、組合を守る。皆で良い人生を送ろうではないかということが根源になっていると思います。

大阪組合はイトーキさんが長い間育ててこられた。野球大会を毎年開催しているが、会場を優先的に貸して頂いている。野球大会は今も毎年1回開催、すでに50回以上の開催が続いています。多いときは38チームが参加、3日間行ったこともある。現在は参加チームが少なくなっているが、継続して開催できているのはイトーキさんのおかげです。組合の会議を行う時も、会員企業さんが順繰りに会場を選定して頂いている。毎回違う場所で行えるよう各会員企業の皆さんにご協力頂いている。会員企業の皆さんに組合を大事に継続

していこうという、前向きに対応して頂いていることを感謝しています。これを今後も続けていきたいと思っています。

諏訪 中国セーフの理事長に就任して、7年目になります。中国セーフの行事の特長は、10月に備前焼の体験を実施していることです。元々、日セフ連の総会時の観光コースで企画したのですが、参加者の評判がよかったこともあって、その後毎年続いています。今年で15回目になりました。組合会員メンバーが家族連れで参加して、毎回20名以上の規模になります。そして翌年の2月には、情報交換のイベントとして、焼きあがった作品の順位を投票で決めて表彰します。ですからこの情報交換会には、40名ほどの参加があり、大変盛り上がりつつ好評です。

中村 私が副会長に就任する以前の話です。先ほど熊平会長が言われた平成18年のオルガタック視察の時、視察団には参加していなかったのですが、同時期にケルンにいた。その時、ケルンのホテルの宴会場を貸切りにして、〆日セフナイト〆のようなパーティーが開催された。手元の資料では、そこに26人が参加したと

記録に残っていますが…。

熊平 いや、実際には50人以上が参加した。

中村 私もタクシーを飛ばして、参加した記憶があります。海外であれだけの規模のパーティーを開き、懇親を深めたことが非常に印象に残っています。

私は平成23年に副会長を拝命して日はまだ浅いですが、翌24年の総会が東京開催の担当ということで協議していく中、都内開催の実施と従来お座敷で開催してきた懇親会の形式を、ガラリと変えたいという会員の声が出た。かつて

昭和47年に京王プラザで1回開いたという経緯があるが、すでに東京組合の会員の中でそれを記憶している人がいない。従来、近県の温泉地域で実施していたのを、会長や事務局長と相談、意見をうかがいながら内容



を詰めていきました。

ちょうどオープン4日目の東京スカイツリーの見学枠を苦勞して獲得したり、東京ベイコートという素晴らしい会員制のホテルを手配することができた。結果的には参加された皆さんに大変好評を得ることができました。これまでの流れを変えようと努めたことが成功してよかったです。その後、九州組合さんが総会を開催した時、やはりホテルバンケットでの開催となり、開催会場の幅を東京組合が広げたと自負しています。

熊平 温泉で開催というのは私の昔からの持論、原則は温泉地で開催ということ。でも東京ベイコートでの開催はユニークで満足すべき総会でしたよ。

角野 私の想いは平成9年に金庫診断士講習・試験を発足し、第1回試験を実施したことが強く印象に残っています。イトーキの伊藤七郎さんが会長の時にスタートしました。今では金庫診断士は709人が誕生していますが、今も相当な効果があると思っています。また社会的にも多くの人々に知られるようになりました。全国均一のサービスができる功績は非常に大きい。

全国規模で同一サービスができる『金庫診断士制度』

と思います。

田中 私は副会長に就任した翌年に、九州・宮崎で総会を開催させて頂いたことが大きな記憶に残っています。その時、強く感じたことが会員皆さんからの多くの労いの言葉でした。とてもアットホームな、ハートフルな組織だということを強く感じました。

私も他のいくつかの業界団体に入っていますが、日セフ連の活動をしていて感じることは、熊平会長が言われたように、非常にコミュニケーションがうまく働いているという意味でのフレンドリーな面が強いということ。また、全国組織としての日セフ連と、それぞれの地域単位の活動がうまくリンクしていることに驚いたことを覚えています。普段は競い合う関係であるはずなのに、このようにコミュニケーションが図れるというのはどういふことなのか、と驚きました。

柿木 先ほどからイトーキという社名がたびたび出てきています。イトーキは金庫製造から手を引いて4年になる。この4年間のなかで最も印象に残っていることがあります。メーカーではなくなったが、金庫製品を今までずっと作ってきて、これからも日本の「安

心・安全」を供給していく位置づけは、たぶん変わらないと思う。これは今後もしつかりとやっていきたいという気持ちはある。ゴルフや宴会等でアットホームな中で、接して頂けることが救いです。

川村 中部組合の理事長を務め、お陰さまで7年経ちます。運送業や鍵屋さんなど協力的な取引先の方々を何とか増やして、盛り上げたいと思っています。懇親会や音楽鑑賞会などを増やして楽しい集いの場を設けましたところ参加率が上がりました。我々の悩みはやはり高齢化です。次の世代に繋げたいと会員を募集したことにより、このたび1社入会頂きました。まだまだ少ない会員社数ですが、これからも交流を深め、情報交換の場にして前進していきます。

―今後も日セフ連の伝統として残していきたいものは何でしょうか。

熊平 日セフ連はアットホームな組合。懇親会は非常に重要ですよ（一同爆笑）。大阪組合の頃は大会会というのがある、懇親会が盛んでした。中国に旅行したりした。今でも年1回旅行があるが、これからも大事

にしたいし、良い伝統だと思います。

内記 コンペティターでありながら、皆さんで組合の行事、催事に力を合わせて協力している。先ほど角野副会長が言われた金庫診断士講習・資格試験実施制度は全国規模で同じサービスができる制度。素晴らしいと思います。金庫を中心にして、やるべきことはきちんと尽力し、また皆で楽しむべきことは楽しむ。そうした伝統が会員皆さんに受け入れられていると思いますね。

諏訪 日セフ連は、懇親会で和気あいあいと楽しむ一方で、いろいろな改革をしています。例えば、JISの改正、金庫診断士の認定、新しい金庫設備試験規格の創設などです。

また、最近特に注力しているのが、環境に配慮した対応です。金



庫廃棄問題は、非常に厄介な問題ですが、日セフ連は責任を持って対応しています。もう1つは有害物質を使用しないということです。VOCを使用しないという環境問題にも積極的に取り組んでいます。

このように、世の中のニーズに対応して、新しい基準を決めたり、行動をしたりしています。併せて、耐用年数を20年という広報活動も展開しています。このような活動は今後も続けていくべきだと思います。

熊平 全く同感です。金庫は「処理困難物」といわれ、地方行政は引き取ってくれない。ですから日セフ連が全部、引き取るシステムを作っている。日セフ連事務局には毎日のように、一般の方から問合せ電話がかかり、その対応に追われているのが実情です。

中村 製造する側として廃棄問題、有害物質問題等を突き詰めていくことは当然だと思います。JIS改正を含め、世の中の変化に対応した基準作りと広報に対する責任が問われていくだろうと思います。東京組合では、全体の大きな集まりは年3回。新年会、総会、夏のビアパーティーの3つの行事に集まって頂いて、親睦だけでなく、活発な情報交換の場となっています。

「耐用年数20年」さらなる啓蒙普及を



ます。そこで会員企業皆さんが生き残るための、商売の糧が生まれればよいし、会員間のさまざまなコラボレーションがあってもよいと思う。東京組合のパーティーでは中締めが過ぎても多くの会員が延々と残られている。他団体の懇親会では、終わるころには参加者はほとんどいなくなってしまう場合もあるが、東京組合では大勢の人々が残っている。開催する側としては本望、そうした場づくりを大切にしていきたいです。

田中 日セフ連活動に参加していると、業界団体というもののイメージが違うと感じた。大抵の場合、業界団体とは売上伸長をどうすればよいとか、いかに儲けるかとかの考えが先にある。日セフ連の皆さんと話をしていると、いかに社会のために役立つか、我々は社会から何を要求されているか、という意識が非常に高いことを感じます。それは

伝統としてすばらしいことだと思うし、ぜひ今後もうないでいきたいと思います。元々、「セーフ」「金庫」という生命・財産・安全等、大切なものを守るという役割があったことが背景にある。先ほどから皆さんが言われる社会的責任の高さ、重さに通じていると思います。ぜひこの伝統は大事にしたいと思います。

川村 ホームページにも明記しているが、お客様には金庫をもっと知って頂きたいと思いますね。金庫に関する環境問題、廃棄処分の仕方などを認識してほしい。危ない業者に金庫を引き取ってもらうと河川敷や池に放置してしまう。正しい廃棄処分業者、処分場を必ずお客様に伝えて、しつかり処分をして頂きたい。

技術に関しては金庫診断士の資格を持つ方が、現場に行き、指導をして耐火や防盜性能等を説明することが大切。中部の地元紙に掲載されたが、「金庫に入れておいてよかった」という例がある。津波で流されたが、小学校の先生が卒業証書を金庫に入れていたおかげで、卒業式を無事に終えることができたといううれしい事実がある。「金庫はいらない」のではなく、金庫のありがたさを伝えていきたい。耐用性能20年を伝えて、ルールについても伝えていきたいと思います。

高齡化や財政問題、知恵と工夫で打開を

―会長として抱えている問題のなかで最大の難問は何でしょうか。副会長の皆さんには各組合での悩みをお聞きたいと思います

熊平 いつも申し上げている通り、最大の難問は金庫の伸び悩みです。

内記 先ほども触れましたが、最盛期には野球チームが38チームを数えたが12、13チームになった。ゴルフメンバーも今は16人くらいで、4組くらいになった。多い時には倍くらい集まった。旅行会のほうも高齡化で人数が減っている。努力して会員を増加しないといけない。

諏訪 日セフ連の設立時の事業内容の中に「組合員の経済的地位の向上」という項目があります。会長が言われたように業界の売上は伸び悩んでいます。そのことで組合員の地位向上は進んでいません。これが日セフ連全体の悩みでしょう。

各地区の悩みは会員がなかなか増えないことがあげられます。中国セーフも熊平製作所の協力会社などに入会をしてもらっています。また金庫以外の関係会社

にも入ってもらっています。それで、ようやく組合の体裁を保っています。

中村 東京組合の悩みは財政面の厳しさがあげられる。中小企業を取り巻く経済環境はまだよくないというのが実情。年会費、賦課金アップはなかなかできない。そうした中、限られた原資の中でのやりくりが大変。もう一つは東京組合の管轄エリアは関東以北全部。都心を中心とした関東圏にいる会員さんは集まりやすいが、それ以外の会員さんはなかなか集まりにくい。その人たちにどれだけのメリットを与えられるかが悩ましいところです。

過去、東京担当の年度に日セフ連の総会を仙台や北海道で開催したことがあるが、やはり年間を通じて東北や北海道の会員の方にメリットを与えることがなかなかできないのが実情です。先ほどの財政面との兼合いもあるが、思い切ったお金を使つての行事ができない。工夫の余地がまだあるが、非常に厳しい状況にあります。

田中 各地区の皆さんが言われる通りです。九州組合はそれ以上に会員数が少なく、財政面で厳しい。そう

した結果はあるが、これだけ日セフ連が社会的に意義のある活動をしていることを、私たちが九州地区にしっかりと反映できているのか、情報発信ができているのかということを私自身、反省し、もっと取り組まねばならない課題だと思っています。

柿木 売上が伸びないことが決定的な要素でしょう。

日本が置かれている絶対的な宿命、高齢化のなかで、ある程度仕方がないことであると思います。では、どうするのかということ

になる。やはり、これまで日本が培ってきた技術力を踏まえて、先ほどから出ている「安全・安心」の基準、規定というところはたぶん、世界でも通用するところではなくさん出てくると思います。

となると、海外に打

って出るといことも視野に入れながら活動すべきではないかと思えます。その時、何をもって海外に出る



のかというと、ハードを持っていつでも難しいので、そこは知恵と工夫だと思う。いろいろな今までのノウハウを含めて、事業展開ができるところが多分にあるだろうと思います。私どもは金庫そのものではないが、いろいろなセキュリティという分野の中で、中国・東南アジアを中心にある一定の規模の市場があるような気がしています。そうしたことを今後、どのように考え、実施、展開していくかが大きな課題になってくるような気がします。

川村 中部組合の悩みは先ほども話したように、技術者の高齢化と財政面での課題です。会費を少し下げてほしいと言われているが、廃棄処分の手数料で中部組合の収入がある程度上がっているので、会員数が減少しても、組合を継続することができている。組合継続をモットーに活動している。それが大きな課題です。なかなか会員増加は難しいであろうが、中味の濃い組合を作って、会員間の絆を深めていきたい。

―現状の金庫、セーフ、セキュリティ業界をどうとらえていらっしゃいますか。会長として、副会長としてどうやっていこうとお考えですか。

最大の難問は金庫の伸び悩み

熊平 伸びにくい業界ですので、現状維持が目いっぱいではないか。しかし、金庫は絶対必要なもので、「いらない」という人はいない。ある一定の需要はあるので今後とも頑張っていきたい。

内記 私は昭和22年生まれの団塊の世代。妻が「そろそろ遺言状を書いてくれ」という（一同爆笑）。家に金庫があるので会社の金庫でなく、家にある金庫に入れてほしいという。妻にしたら私が死んだ時に遺言状が手元にあると安心という訳。団塊の世代は最も人数の多い世代です。そうした人たちが年齢を重ねていく中で、遺言状と一緒に金庫もセットで売するような方策を考える時代を迎えているのではないか。高齢者はどんどん増えてくる。そうした方策の提案を実施、展開することで業界を知らしめる転機になるのではないか。

どこかの信託会社などとコラボして、遺言状の相談と金庫をセットして提案する。「奥さん、家に置いておけば安心ですよ」と提案販売するのも一つの手段と考えています。

諏訪 セキュリティというと多くの人が、SECOMやALSOCのような警備をイメージすると思います。

しかし、大切な物を保管するという役割を考えると、金庫も立派なセキュリティ商品です。大切な物とはお金や貴金属に限らず、他人にとってはゴミであっても本人には宝物のような物、例えば昔の写真や記念品なども含まれます。金庫で大切な物を火災や災害から守るという点では、SECOMやALSOCのような警備と違ったセキュリティとして存在します。その点からすると金庫市場は爆発的に大きくはならないが、なくならない市場だと言えます。

中村 総合セキュリティ企業が目指しているものは多岐にわたっていると思います。外部からの侵入者だけでなく、内部における問題解決の方法をどうするか。そうしたなかで金庫をどのような位置づけでとらえていく、という思考も必要だと思います。先ほど内記副会長が言われた嫁入り道具に金庫というお話は、以前神戸の榎本金庫さんが喧伝され、地元紙にも掲載されたりした。そうした売れる契機は何かないかと多くの方が考えていらっしゃる。

業界としては有効耐用年数20年を謳っているが、順守されているかというと、なかなかできないでいる。かつてこれを一番守ってもらえた行政組織は「郵政」

だった。今は一企業になったので、ほかの行政組織で購入して頂いている金庫は、「有効耐用年数20年」であることを業界団体として主張していくことが必要だと思う。保険機構との連携も過去に取り組んでいるが、当時は時代背景も含めて対象が少ないということもあり、頓挫した。改めてそうしたものを機構的に連携していく中で、金庫をもう少し購入してもらえないようにするとか、考える必要もあるのではないかと。非常に難しい問題の中で何か手を打っていかないといけないという思いはあります。

角野 もう誰もが金庫自体は、単体では成熟商品であることに異論はないと思います。そんなに売れないだろう、需要も増えないだろう。しかし、半減もしないだろう。ではどうすればよいか。個人的な考えですが、やはりシステム化できるか否かだ



と思います。金庫単体ではなく、他商品との連携ができるかどうか。それを模索していく。システム化を考えた企業が前面に出てくると思う。単体ではもう終わり、増えない。いろいろなものとのシステム化ができるか否か、複合的に金庫がその中に入っていく、その中に需要というものが見込めるのではないかと思います。難しいが、それを突破していかないといけないと思います。

諏訪 システム化というと金庫を他の情報機器とオンラインで結びイメージがあります。そのオンラインの相手が何で、どういう機能が要求されるのが問題だと言えます。金庫のオフラインで手軽に使えるというメリットをどう考えるかということが重要なことだと思っています。

田中 金庫は形あるものを入れる道具です。現代はモノそのものが減っていく時代。情報化されていくという世の流れの中で、成熟気味というのは確かにあるのかなと思います。ただ一方でこれから進むグローバル化、経済的な発展が見込める地域はたくさんあると思う。特にメーカー側の立場で申し上げると、市場とし

ては可能性は十分あると思っています。ただ進出していくのに、単体としてというよりも角野副会長が指摘するシステム化、他のサービスにあると思います。これまでなかったソリューションとしてのセーフ等、これがどのように世代の中で生まれてくるかというところに、もつと着眼点を求めるべきではないかと捉えています。

柿木 正直言つて答えは、なかなかないのが実情かと思っています。オフィスの中は高い割合でセキュリティに守られている。家庭についても富裕層が中心になるのだろうが、自宅のホームセキュリティもやっておられる。とするとなかなか単品の金庫は売りにくいかなと思ってしまう。でも、先ほどから皆さんが仰ったように、いろいろな知恵、工夫、思い入れを含めて、アイデアというものは本当にないかというところからない。もつと議論をして、これからどういう形で金庫を販売していける余地があるのか、真剣に考えてみる必要があると思います。国内だけでなく、グローバル的な展開を考えることも必要であることを視野に入れながら、真剣に考えないといけないと思います。今は苦境の時かもしれないが、皆で知恵を出し合つて、どうい

う形で金庫そのものを販売していけるか真剣に考えるべきだと思います。

川村 普通、金庫というと置き金庫、家庭の金庫ばかりを思い浮かべる。これからは他商品とのシステム化の時代です。ユニット関係の金庫でオフィス家具とのシステム販売をしていく。またお客様から「核シエルトーはないか」と言われた。核シエルトーを地下に造つてくれないかという商談です。今後、要望はいろいろ出てくると思います。アイデアはお客様から頂ける。住宅関係の建材、耐火性能、耐火パネル等、もつと勉強しないといけないが、それは私たちの課題でもある。お客様からヒントを頂きながら需要拡大を図りたいですね。

—100周年に向けて、日セフ連のあるべき姿をどうお考えですか。

諏訪 日セフ連は、建材試験センターや警視庁生活安全課などと連携をとりながら、業界として、製品の品質を上げていくことが重要ですし、また世の中のニーズに合った製品にしていくことも重要なことで

夢と希望にあふれる産業目指したい

す。このようなことを進めていくなかで、日セフ連は懇親会を行い、情報交換をし、コミュニケーションを図る（笑い）。やはり、業界はまとまらないと官庁などとは折衝がしにくいと思われます。「安心・安全」を守る業界というものは、何か不都合があると社会不安につながります。品質や対応の問題などについて、業界が一つになって官庁などと協議を進めていく必要があるのではないのでしょうか。

中村 若い世代をどう育てていくかが課題です。会員の皆さんは金庫だけを販売している人たちばかりではない。東京組合の会員の構成を見るとファニチュア分野の人たちも多い。その人たちに何を提供できるかと考えないといけない。青年部会の構成は金庫に関わらない人たちも多い。そうした状況を踏まえて活性化を図っていくにはどうすればよいか。今、大阪の青年部会との交流を復活しようという話も出ています。ぜひとも各地区組合の次の世代を担う人たちがまた、別の形で交流が始まる流れが出てくるといいなと思っています。日セフ連の傘下組合の交流と、行政を含めた関係機関との連携の強化を同時進行で進め、頑張らないといけないと思います。

―話は出尽くした感じがします。熊平会長に締めのお言葉を願います。

熊平 日セフ連50年の歴史を振り返り、思い出話や抱える課題、解決策など、副会長の皆さんが普段お考えになっていることを改めてお聞きすることができました。本日のこの貴重なお話が、今後の日セフ連活動に反映されることを願っています。セーフ・ファニチュア産業が若い世代の人々に引き継がれ、夢と希望にあふれる産業になることを期待しています。日セフ連活動がさらに充実した成果を得られますよう、会員皆さんのお力添えをお願いします。

本日は、長時間にわたりお話をうかがいました。ありがとうございました。

*

【熊平会長叙勲】平成26年、旭日小綬章を受章



日本セーフ・ファニチュア協同組合連合会
会長・熊平雅人氏が経済産業省の推薦により、
平成26年秋の叙勲で旭日小綬章を受章されま
した。平成26年11月11日、東京プリンスホテ

ル2階「鳳凰の間」で勲章伝達式があり、午
後より皇居「豊明殿」におきまして夫妻同伴
で天皇陛下に拝謁されました。

平成26年11月17日の九州熊本の理事会にお
いて、叙勲について触れられ、「このように
して叙勲の栄に至りましたのは、役員をはじ
め組合員の皆様、諸先輩の方々のお蔭と心か
ら感謝いたしております」と挨拶されました。

また、懇親会の席上、内記副会長が今回の
熊平会長の叙勲について「本当におめでとう
ございます」とお祝いの言葉を述べられ、会
場の皆様も拍手を持ってお祝いを致しました。

会長は日セフ連の理事12年、副会長2年、
会長を13年6カ月務められ今回の受章となり
ました。特に親睦と団結を訴えられ、各地区
組合での持ち回りの総会、理事会を開催し、

業界を活性化、団結力を培ってこられました。経済産業省に認められた功績をあげますと、耐火金庫のJIS規格の改正、とりわけJIS規格に耐破壊性能TS-15を追加し金庫の防盜性能の強化、また耐火金庫・防盜金庫の型式認定制度を実施し、また金庫の塗装のVOC対策認定制度を立ち上げ、金庫診断士の業界認定制度、金庫設備の業界認定制度を策定したことなどです。

また会長は社会貢献として、新聞、雑誌等から抜粋したエッセーやコラムをまとめた小



冊子「抜萃のつゞり」を発行し、全国8万4000カ所、45万部を寄贈しております。さらに、留学生に對し奨学金を



支給し友好親善・人材育成に尽くされております。
日セフ連事務局

【海外視察】ORGATECと欧州視察

(株)エーコー 取締役 営業統轄部長 佐藤 健

平成18年10月23日から10月29日の7日間で、日セフ連主催の「国際オフィス家具見本市(ORGATEC)と欧州視察」へ参加してまいりました。

見本市はドイツ・ケルン市のケルンメッセで開催され、視察には日セフ連に加

盟する13社から16名が参加しました。おそらく私を含むほとんどの参加者が、ドイツ訪問は初めてだったと思われます。成田から乗継を含めて約20時間のフライトで、無事にケルンに到着。長い1日目が終わりました。



2日目、ホテルからバスで会場入りし、正面玄関前で記念撮影をした後に、各自自由見学となりました。会場のケルンメッセは、日本では想像がつかないほどの大きな展示場で、この年のオルガテックでの展示総面積は13万㎡もあったそうです。オルガテックは、2年に1回開催されるオフィス家具に関する世界最大

級の見本市です。この年は「家具」「照明」「床」「音響」を開催テーマに、出展各社が製品紹介や利用空間の提案など幅広く行っていました。世界最大級というだけあり、世界40カ国から678社(ドイツ国内277社、外国401社)の出展があり、世界各国から5万7000人が訪れたそうです。私も広い会場のさまざまなブースを回ったところ、日本のオフィス家具メーカーも4社出展していました。国内の展示会とは異なる雰囲気の中で、当時最新のオフィス家具を体感することができ、大変勉強になりました。展示会場ではたくさんの写真を撮り、帰国後にその画像などで多くの方に説明をすることができました。

やはり気になるのは金庫です。広い会

場を探したところ、1カ所展示しているブースを発見しましたが大型のものではなく、小型のもの（ホームセーフ）が数アイテムあっただけで、あまり参考にならないことが残念でした。今回の見本市はセキユリティというよりも、これからのオフィスづくりに向けての開催テーマが設けられていたのだいたしかたないことなのでしょうが……。しかし、非常に参考になったのが、このようにきれいに整ったオフィスには、従来からの重々しい金庫では外観的にもマッチしないということで、今後のオフィス向けの金庫のあり方を考えていかなければならないことを感じました。

会場の見学を終えた夜は、ケルン市内のホテルで、見本市見学に訪れたほかのツアーの日本企業の方々との合同ウェルカムパーティーが行われました。パーティーには46名の参加があり、たくさんの情報交換、そして親睦を深めることができました。

3日目以降は、視察ツアーに参加された方の会社が出展していることもあり、見本市視察組と欧州視察組の2つに分かれての行動となりました。私は欧州視察に参加し、オルガテックの自由視察の後に、バスでミュンヘンへと向かいました。4日目・5日目は、ミュンヘンからバスで



ロマンチック街道を北上し、フュッセン・デュンケンスピュールを経て中世の街並みを残すローテンプルクへと向かいました。その景色は

とても美しく、癒されたことが未だに心に残っています。特に印象深いのが、ルードヴィッヒ2世が築いた優雅なノイシュバンシュタイン城（シンデレラ城のモチーフになった城といわれています）です。歴史を感じる壮大な城でした。その後、古城街道を北上して最後の滞在地であるフランクフルトへと向かいました。視察最終日は、フランクフルトでの自由行動となり、思い思いの散策を楽しんだ次第です。

国際的なオフィス家具見本市の視察、ドイツの美しい自然や街並み、歴史を体感することができ、自らの世界観が広がった体験となりました。

【大震災の教訓】阪神・淡路大震災／東日本大震災の火災と津波から

日セフ連事務局 中村文雄

平成7年1月17日、淡路島を震源とするマグニチュード7・2の直下型大地震が阪神地方を襲った。死者5000人、倒・損壊家屋11万棟にのぼるこの大震災は、関東大震災に次ぐ未曾有の規模となった。

日セフ連では、現地に調査団を派遣し現状を調査した。

この阪神・淡路大震災は、特に高速道路等道路の損壊が激しかったため消防車や救急車が現場に到着できず、多発的に発生した火災に対してなすすべもなく立ち往生する状態であった。鎮火までに数時間



阪神大震災／
住家の延焼や道路が塞がれた様子

出典：消防科学総合センター

かかる場合もあり、耐火金庫の中の収容物も駄目になってしまうケースもあり、業界としてもこの対応を迫られた。その教訓を踏まえ、4時間の耐火性能をもつ耐火金庫を各メーカーが開発した。また、この大震災で注目を集めたのは貸金庫の存在であった。金融機関では金庫室に貸金庫を設置しており、被害を免れることができた。

そして平成23年3月11日、三陸沖を震源とするマグニチュード9・0の東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）が発生。震度7の強い揺れと、国内史上最大の津波に襲われ甚大な被害をもたらした。また、東京電力・福島第一原子力発電所が津波で浸水したため電源を喪失、水素爆発を起こし放射性物質が漏れ出す深刻な被害となった。



東日本大震災／船越郵便局跡



津波に流されて押しつぶされた郵便局のATM機

このように勃発した大震災により尊い命と財産が失われ、その復興には長い年月がかかる、人生を左右されるような深刻な事態が起こる。我々は安全と安心を創出すべく大切なものの、かけがえのないものを守るための方策を社会に発信していかなければならないと痛感している。

死者1万5000人、行方不明者2500人、建物被害は全半壊37万戸超に及んだ。日セフ連は4月3日～22日の期間、チームを編成し、流された金庫の収集と開放を行った。特に、同震災の特徴として、10mを超える津波が甚大な被害をもたらし、家屋を根こそぎさらっていったり、大型船を陸地に乗り上げさせたりと、予想をはるかに超えるものであった。

が岩手、宮城、福島、福島の3県で5780個あり、所轄署の車庫や会議場に所狭しと並べられた。そして9割以上もの金庫の中の現金と預金通帳、権利書が持ち主に返還された。これは週刊誌の記事にもなり「金庫を使用していたから、大切な財産が戻ってきた」と書かれ、やはり最後の「砦」は金庫であると実感した。

金庫室内の金庫を開けた様子



陸前小泉郵便局跡。金庫室だけが津波に流されず残った（写真中央）

東日本大震災の写真はすべて、日セフ連調査チームが撮影

【新JIS改正】新JISマーク表示制度への取り組み

(株)熊平製作所 技術顧問 江川琢美

昭和43年に耐火金庫のJISが制定され、以降、日セフ連各社は厳しい試験と工場審査をパスしたJIS製品をお客様に提供してきましたが、平成17年10月1日から、新しいJISマーク表示制度がスタートすることとなりました。この「新JISマーク表示制度」は、従来の国による認定から民間第三者認証機関による認証、国によるJIS対象製品の限定（指定商品制）の廃止等、昭和24年のJIS制度発足以来の大幅な制度変更です。

この制度変更で近年の生産技術の進歩、使用者・消費者ニーズの多様化、製品認証制度に関する国際ガイドへの整合性、制度利用者のさまざまなニーズに関して、国の関与を最小限とした弾力的な対応が可能となるとされ、JISマークも刷新

【旧JISマーク】



指定商品の場合



指定加工技術の場合

【新JISマーク】



鋳工業品用



加工技術用

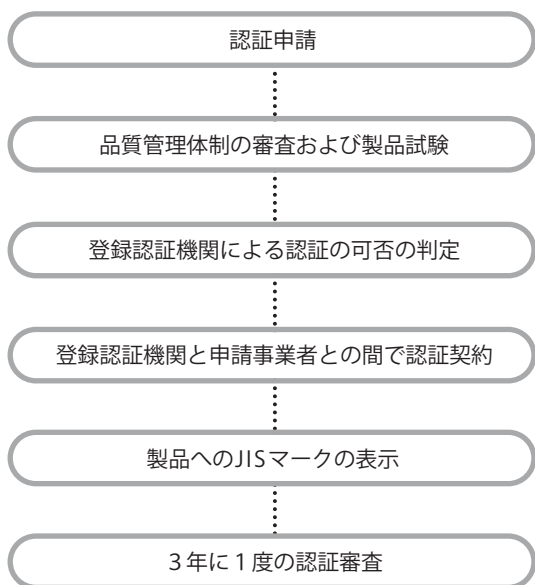


特定側面用

制度」へ移行する必要がある、当初より認証機関の試験、認証業務に大きな混乱が生じると予想されました。

そこで、日セフ連では「新JISマーク表示制度」への対応のため、平成16年1月から技術委員会を中心に勉強会を開催し、経済産業省や建材試験センター等、関係機関と調整を重ね、準備を進めました。第三者認証機関による製品認証という大きな制度変更のため、新たな制度の中で、認証機関による耐火金庫のJISに基づく製品試験の再試験が必要となったことから、試験体の限定、試験回数削減等、関係各社の負担軽減を図るために折衝を続け、平成17年9月に最終的な製品認証審査の内容が決定されました。さらに旧JIS製品は、経過措置として平

新JISマーク認証取得の手順



成20年10月1日まで旧JISマークでの出荷が可能となりました。平成17年10月には耐火金庫を認証する認証機関として、(財)建材試験センターが正式に登録され、新JISマーク制度による耐火金庫の認証業務が開始されました。認証業務は、初回の製品認証審査として、工場審査、製品試験が実施されます。製品試験は性能区分（一般紙用、磁気テープ用、フレキ

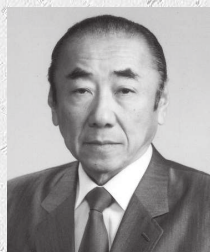
シブルディスクカートリッジ用）毎に認証機関が耐火試験、破壊試験等の各試験体を工場内で抜き取りし、試験が実施されます。また、3年毎に1回、認証維持審査として、工場の品質管理体制の審査と製品試験が継続的に行われることになりました。日セフ連理事会において、新JISマーク製品は平成19年4月1日以降の発売とする取り決めを行い、具体的な新JISマーク取得の活動が開始されました。折しも、日セフ連で進めていました耐火金庫のJIS改正が平成18年3月に公示されており、耐火金庫JIS取得メーカーでは、この規格改正の対応を進めているところでした。これは耐火金庫に最低限の防盜性能を付与する規格改正で、耐火金庫のJIS製品には防盜性能（TS-15）を付与する製品改

良が必要となっていました。

いずれにせよ、防盜性能を付与した場合、新たに防盜試験と耐火試験を受ける必要があります。「新JISマーク表示制度」への対応を前に、多数の試験を行う必要があります。こうした中で、日セフ連事務局による耐火試験実施に関する各メーカーの調整、試験センターとの折衝等、新JISマーク早期取得に向けての尽力と、各メーカーの積極的な取り組みにより、経過措置期間を前にした平成20年9月には耐火金庫のJIS取得の全メーカーがJIS改正対応と新JISマークの認証を受けることができました。

「新JISマーク表示制度」は、初回認証審査後、3年毎の認証維持審査により、工場審査及び製品抜き取りによる耐火試験、破壊試験（防盜試験）の実施等、品質確認が継続して行われます。業界にとつて極めて負担の多い制度ですが、耐火金庫の品質向上、さらに信頼性確保において、その貢献は大きいと考えています。

寄稿 「祝賀50周年を新たな門出の年に」



初代内閣安全保障室長 佐々 淳行

引くほど、矢は遠くへ飛ぶ」という言葉がありますが、50周年というのは、我が国金庫業界約150年の歴史を紐とぎ、越し方50年の連合会の先人の努力に感謝し、これからの50年先のビジョンに思いを馳せる「天の時」だと思っています。この機会に、貴連合会の益々のご隆盛、また、組合各位のご健勝、ご多幸を心から祈念申し上げます。

先進国米国防視察団に同行

私にはこんな懐かしい思い出もあります。それは、中東の湾岸戦争が丁度一段落した1995年頃と思いますが、クマヒラの飯塚副社長一行と米国防情報局 (Defense Intelligence Agency, 略称：DIA) を訪問し、世界最先端のハード・ソフトのセキュリティ情勢を学ぶことができました。DIAが、軍事技術の民生活用(移転)を始めた時期でした。

それまでの日本のコンピュータシステムは、巨大な親コンピュータに小型のコンピ

日本セーフ・ファニチュア協同組合連合会創立50周年、心からお祝い申し上げます。

激動の内外情勢の中、貴連合会は、創立以来安全産業(危機管理産業)の最右翼として、これまで国民や社会の期待に応える活動を展開されてこられました。特に最近の活動、即ち、耐火金庫のJIS改正や国際標準化の動向調査(日セフ連規格、UL・EN規格の比較)、耐火・防盜金庫の型式認定制度の実施・啓発、耐火・防盜金庫の持ち去り対策ガイドラインの作成、消

費者の目線からのVOC対策、金庫診断士の育成、耐火金庫の回収等環境対策の推進、文化財保護事業、警察庁・警視庁への対応等々、金庫業界をめぐる時代の変化への的確な対応、また、貴連合会各専門部会・委員会の真摯かつ科学的な対応、そして、連合会の決定事項に対する組合挙げての啓発・実践的取り組みなどは、いずれも時代の要請に沿うものであり、深甚の敬意を表したいと思います。

『歴史を学ぶは弓矢の如し。弓を引けば

ユーターが沢山ぶら下がる縦型構造でした。

ところが米国では、アップル型といって、横型連結式のコンピュータシステムで、憲兵役のコンピュータがシステム全体の安全を監視するというをやっていた。セキュリティ設備やシステムの安全管理についての新しい考え方でした。例えば、アクセスコントロールといって、休みの日にコンピュータにアクセスする者のデータ分析や情報アクセスの不正をチェックするなど、情報アクセスの不正をチェクするなど、24時間「情報や人の行動」を監視可能な危機管理システムを創り上げていました。

これらのシステムは、今では当たり前になっていますが、当時、われわれの視察団は、日本人でいち早く世界の最先端の情報管理やセキュリティシステムを目の当たりにし、大いに刺激を受け、それを日本へ持ち帰って金融機関向け金庫設備やセキュリティシステム機器の設計や製造に活かし、今日の金庫業界はじめ警備や情報管理分野など広く日本の危機管理の発展に役立てたのです。

今後の日セフ連への期待（未来軸）

さて、金庫というのは、即物的には硬い金属の塊であり、金庫の守りも「物の管理」、即ち、静的管理、したがって金庫業という仕事も「固い仕事」と考えがちですが、私はそうは考えていません。守るべきものは何か？ 守るべきは金庫そのものではなく、国であれば会社であれ、個人であれば金庫の中に納められている「ハード・ソフトの財物」です。即ち、環境の大変化に対して、鋭敏な安全センスを持ち、柔軟な発想、最新の技術力で臨まなければ、これを守ることはできません。今、我々を取り巻く環境に3つの大変化が起きています。第1は東日本大震災後に発表された南海トラフや、首都直下の2大巨大地震に関する予測とこれへの国の対策基本法や基本計画決定（2014年3月）動向及び地球環境の変動に伴う記録的豪雨・土石流等によって金庫ごと流されてしまうなど「経験のない自然災害の脅威への備え」。第2は人類が

これまで経験したことがない少子・超高齢社会等「急激な社会基盤の変動に伴う脅威への備え」。第3はサイバーテロ等「新たに出現した社会的脅威への備え」です。即ち、国家（ナショナル・セキュリティ）、自治体から企業の金庫、そして個人宅の金庫（社会への不信心によるたんす貯金・ホームセキュリティ）まで、貴連合会に対する国民の期待には甚だ大きなものがあります。今年は、戦後70周年の年。敗戦後、何から何まで初めてのことに我々の先祖は官民挙げて取り組み、見事日本を復活させました。我々も、経験がなくとも危機の速さと大きさを予見し、これに「正しく備えること」こそ重要なのです。

『知性の悲劇、樂觀の意思』（ロマン・ラン）という言葉がありますが、人類は、常にその「樂觀の意思」「未来への意思」が、誰もが困難と思ったことを克服し、新しい時代を切り拓いてきました。貴連合会の益々のご隆盛と関係各位の一層のご健闘を祈念してやみません。

寄稿 「これからも日本の安全・安心に貢献を」



日本防犯設備協会 特別講師 富田 俊彦

日本セーフ・ファニチュア協同組合連合会が創立50周年を迎えられましたことに、心からお喜びとお祝いを申し上げます。貴連合会は50年の永きにわたり、我が国の安全と安心のために貢献されたことに心から敬意を表します。

日セフ連との出会い

私が日セフ連と関わりを持つようになったきっかけは、平成9年9月26日、墨田区両国のクマヒラビルで行われた日セ

フ連主催の「21世紀のセキュリティ勉強会」に招待され、「最近の金庫破り事件の発生傾向と対策」について講演したことでした。

金庫破り事件の全国の認知件数は平成6年まで4600件位を推移していました。平成7年頃から来日外国人窃盗グループが暗躍しはじめ、平成9年には9164件と約2倍に激増し、当時の犯罪増加は異常事態となりました。それまで金庫は堅牢性・耐火性を重点に置いていました

が、犯罪の増加によって防犯性が問題視され、見直す対策が進められました。

その後も、平成11年11月25日、イトーキプレンルームの勉強会で講演、平成13年9月4日、クマヒラビルで会員に対する防犯講演、平成14年6月25日、「防盜金庫、耐火金庫の新防盜規格策定のための勉強会」で金庫の破壊手段等を解説、平成14年7月24日、「新防盜規格の破壊実験方法の検討会議」に出席するなど、金庫の防犯性能を高めるために微力ながら協力させて頂きました。また、総会での防犯講演、賀詞交歓会に出席、財建材試験センターでの金庫防盜試験の見学等でお世話になり、警視庁・各県警察学校では講師の派遣や資料提供をして頂きました。

金庫の破壊実験に協力して頂く

金庫破りは他の事件と異なり、犯人は金庫の知識とハイレベルな技術、経験を要します。金庫破り常習者は金庫の構造

や弱点を学び、経験を活かして破壊用具を選定し、攻撃方法を研究し日々技術向上に努めています。犯罪捜査では事件現場での的確な実況見分がとても重要なことで、その成否が事後の捜査と立証に大きく影響します。金庫破り事件の捜査技能を向上させるためには、捜査員自ら金庫の破壊体験をすることが捜査員の見分技術を向上させ、犯人検挙や取調べにも大変役立ちます。

全国の捜査員のレベルアップを図るために、九州管区、近畿管区、関東管区等の管区警察局で行われた手口担当者会議では、日セフ連の各金庫メーカーに金庫と破壊工具等の提供をお願いして、破壊実験を実施しました。現在でも後輩刑事達が金庫の破壊実験を行っており、捜査技術の向上を図っています。

金庫の役割

「金庫は防犯の要」であると言われます。犯罪者の中には金庫が存在するだけで、自分はこの金庫を開けることはとても無理だ

と犯行を諦める等、犯罪抑止に大きな効果があります。金庫は大切な財産や重要なデータ、かけがえのない家族との思い出、その土地の伝統や文化等を守る大事な役割があります。防犯性能のある金庫は国民が安全で安心して暮らす、生活向上のために必要なものです。防犯性能を有する防盜金庫の有効性と必要性について、官民が連携して、国民にPRすべきだと思います。

大震災から学んだ金庫について

3・11東日本大震災では電源が喪失し、住民が避難して無人の信用金庫の金庫やATM機が破壊されて多額の現金が盗まれる被害がありました。一方、地元中学校では、金庫の開扉を依頼された錠前業者が苦勞して解錠し、金庫内に保管されていた卒業証書を取り出して無事卒業式が挙行されました。岩手、宮城、福島

者の多い我が国だからこそ可能なことで世界に誇れることです。また警察では拾得された金庫の所有者を捜し出して96・7%の物を所有者に返還しました。これは奇跡的な出来事でした。災害の多い我が国では財産や大切な物を守る最後の砦として、これから益々、金庫に対する期待は高まるものと思います。

これからの日セフ連に期待すること

最近の金庫破り事件の傾向をみると、犯人は防犯カメラや機械警備が設置されていることを知りながら、グループで目出し帽を被り、金庫や集金箱にロープを結束して自動車で強引に搬出する等、短時間で手荒い手口の犯行が目立ちます。金庫破り事件が全国で最も多く発生したのは平成12年の1万1942件でした。この年はピッキングによる侵入盗の認知件数が2万9211件と最も多く、雑居ビル内の会社事務所や店舗が狙われて、各階の出入口ドアをピッキングで解錠し

て侵入する連続の金庫破り事件が一举に増加しました。ピッキング事件の認知件数に比例して金庫破り事件の認知件数も増加しました。ピッキングが困難なCP錠の普及や防犯カメラの普及、地域住民の防犯活動等が犯罪抑止に効果を挙げた結果、11年連続して犯罪は減少しており、金庫破り事件も減少し続けています。

これから超高齢化時代、外国人の雇用、

2020年東京オリンピック、観光客の増加等、グローバル社会を迎えますが、国民自らが、財産や大切な物を守る機運が高まって金庫をはじめ防犯性能の高い家具等が求められる時代になり、日セフ連に対する期待は益々高まると思います。犯罪の発生状況を正しく把握して、金庫の設置場所ではCP建物部品、防犯カメラ、機械警備等を効果的に使用するなど

他業種と連携し、関係省庁、自治体、警察、関係機関・団体と相互に協働して、国民の安全と安心に寄与されることを希望します。

結びに、日本の安全と安心をリードする、日本セーフ・ファニチュア協同組合連合会の益々の御発展と皆様方の御健勝をお祈りいたします。

50年という1つの大きな節目を迎えた今、金庫業界は需要の横ばい傾向から成熟した産業と言われている。長く人々に安心・安全を提供してきた金庫の需要がなぜ伸びなくなってしまったのだろうか。その現状を次代を担うべく人々はどのように捉えているのか。その現状を見つめることで、これからの50年、100周年を迎えるための発想が湧き上がってくるのではないかと。そして、その50年後、業界はどのようなになっているのか。日セフ連はどうあるべきなのか。これを趣旨として、日セフ連・広報委員会メンバー企業から7名が出席し大いに語った。

出席者 稲川直樹 (株サガワ セキュリティ事業部 係長)

近藤 朗 (株)エーコー 企画開発部 企画課 課長)

佐伯 享 ((株)クマヒラ 企画本部企画部 部長)

塩谷裕司 (株イトーキ マーケティング本部 商品開発統括部
設備機器商品開発部 商品企画チーム)

田村哲郎（金剛(株)製造本部 副本部長）

土井 洋 (日本アイ・エス・ケイ(株) 鋼製品事業部 営業課長)

布野世通夫 (株) ナイキ 執行役員 オフィスデザイン部 部長

司会 中村文雄（日本セーフ・ファニチュア協同組合連合会 事務局長）

現状を見据えながら50年後のカタチを考える



「多様な発想で成熟化からの飛翔へ」



・敬称略・氏名50音順（役職は平成26年8月、座談会実施当時のものです）
・座談会内での発言は匿名としました

家庭用はニーズの掘り起こしがまだできる

司会…本日はお忙しい中、お集まり頂きありがとうございます。金庫は長い歴史を持ち、人々の生活に密着しながら今日まできました。日セフ連の設立50周年という機会に、金庫業界及びに連合会の今後に向けた忌憚のないお話しをうかがっていきたいと思います。

まずは、今後の金庫・セキュリティ業界を考えていくうえで、現状をどのように見据えているかからお聞きしたいと思います。

D 犯罪白書などの数字から見ると、金庫にまつわる犯罪数のピークは過ぎて落ち着いた状態にあるのではないかと思います。だからと言って犯罪がなくなるわけではありません。金庫の役割である、防犯と火災への対応というのがメインなのはこれからも変わらないと思います。

このようなことから考えると、確たるデータを持っているわけはありませんが、金庫にまつわる犯罪は、大きく増えるようなこともなく少なくなることもないのではないのでしょうか。火災に関しても同じことが言えると思いますが、今までの日本の金庫の特長として、火災から守るということに重点が置かれていたのが、今後はより防盜に重点を置いて業界として消費者の方

に説明していくことが必要ではないかと思っています。金庫の耐火性能を軸とした使用期限の20年ということをずっと広報してきましたが、現状としてその認識は消費者に定着していません。これは今後も継続して広報していくべきことです。犯罪件数もピーク越えて少なくなってきたものの、犯罪というものは未来永劫なくなるものではないので、こちらの方面にも力を注いでいく必要があると思います。

G 20年の使用期限ということがでしたが、お客様と直接話してみると、9割以上の方が金庫の耐用年数というのをご存知ありませんね。業界として設定している安全・安心を担保できるこの使用期限は、もつと啓蒙の必要性を痛感しています。企業で使われる業務用金庫は、普及が行き届き飽和状態にあると思います。今後は買い替え需要を含めて横ばいで推移していくのではないのでしょうか。

一方のコンシューマー向け、いわゆる家庭で使われる金庫は、過去20年間の生産台数から単純計算してみると、日本の全世帯数に対して約2割程度の台数しか生産、販売していないという数字になりました。この数字から家庭で使われる金庫は、まだニーズの掘り起



クマヒラ・佐伯

こしができるのではないかと考えています。また、以前、台数が出ていた頃にそのボリュームを占めていたのが価格の安いものでした。それに対して今は、付加価値のある金庫の方が売れるようになってきた印象があります。今後はどのような価値を付加していくのかという部分をもっと広げることを考えていかなければならないと思います。

F オフィスデザインという面から、業務用の金庫が過去からどのように変わり、現状はどうかを考えてみると……かつてのオフィスは、オープンなカウン

ターの受付があつてその後ろに執務空間があるというレイアウトでした。それが今は、受付と執務空間を完全に仕切つて執務空間のセキュリティを高めるというレイアウトが増えています。重要な物を金庫という固体での

管理から、セキュリティを高めた空間全体での管理へと変わってきています。

このほかにも変化してきているものとして、現金をオフィス内に置かなくなってきたことや、書類の電子化が進んで重要書類というものが少なくなっているということから、金庫が小型化してきていると思います。クラウドコンピューティング化等がさらに進み、書類そのものがオフィスからなくなるといふ状況になつても、はたして金庫はオフィスに必要なのでしょうか。

業務用金庫の需要がなくなることはないと思います。が、要求される機能や形状は違つてくると考えます。

E 最近の傾向としては、海外の輸入品がインターネットで安い価格で販売され、売れている状況があります。一般のお客様それぞれに価値観があるとは思いますが、それら価格の安い金庫に重要な物、大切な物を入れていくという現実があります。金庫という名称が付いていけば、性能には関係なく重要な物を保管するというエンドユーザーの意識は、金庫業界としてはとても懸念すべきことだと感じています。

以前、日セフ連の広報委員会で、TS-15の認証の



ナイキ・布野

有無によって「耐火庫と金庫」の呼称を変えたらどうかという提案があつたようですが、このような考え方を改めて見直し、本当に大切なものを保管するのならば「金庫」、火災からの焼失を守るだけでよいのであれば

「耐火庫」というような、性能による区分けの正しい知識というものを一般のエンドユーザーの方々に啓蒙していくことが必要ではないかと感じています。

業務用の金庫は金額も高額になるのでネットでの販売というものはなく、個人向けの小型金庫がネット販売の中心というのが現状です。しかし、今後のオフィスの変化という話もありましたので、個人・企業という括りではなく、金庫の性能区分ということに対しての啓蒙も必要になってくるのではないのでしょうか。

A 震災など天災に対して、日セフ連や各メーカーは

即座にその対応に動いていました。東日本大震災の際にもすぐに対応に動いたことで、漂流した金庫から中身が持ち主に返却されたということも報じられました。このようなことから金庫に目が向くかと期待もあつたのですが……原因が津波というあまりにも大きなものだったので、金庫の重要性にまで意識は結び付きませんでした。津波の影響のあつた金融機関に納める機会があつたのですが、防水ということに対してお客様が触れることはなく、どちらかというと防犯方面に関心があつたことを感じました。東日本大震災から時間を経過し、防災に対する意識が薄れていきている中、災害というものに対しての対応ということを視点にしてもよいのではないのでしょうか。

セキュリティの全般的な市場は微増という印象がありますが、オフィスには必ずセキュリティがあるという状態ですので、その中で金庫として少しずつ時代やニーズに合わせた変化をしていくべきではないかと考えます。どのように変化をしていくべきかという具体的なイメージをつかみ切れていませんが、金庫としてこのようなアプローチをしていけるのであれば、再び需要は上がっていくのではないかと感じています。

性能区分の正しい知識啓蒙が必要

B ピッキングと併せて金庫の持ち去りという犯罪が非常に多く発生していた2000年頃には、防犯に対してのセキュリティに一般の方も関心を持たれて金庫が売れた時期といえました。その後は、人の生命にかかわるような犯罪が多くなってきたことから、そちらの方面に意識が移っていきました。セキュリティという面では平和になってきましたが、凶悪犯罪が増えてきたことから金庫の伸び悩みが生じている状況がまずあると思います。また、先ほどもありましたが、海外から入ってくる安価な金庫への対抗策として、メーカーとしての企業努力を重ね価格を抑えようとしていますが、それに追いつけないという状況もあります。このように現況を捉えています。

これに加え、一般の方々の意識というものがありません。それは「金庫＝頑丈」というもので、1度購入すれば一生使えるという意識です。日セフ連が金庫の耐用年数は20年です、といういろんな手を使って広報していますが、それが末端まで知れ渡っていないというのが現状です。最近、当社ではテレビメディアなどの取材が増えてきていますので、その際には金庫は一生物ではないということをアピールしています。

さらには、現実的に見ても日本は国の赤字も膨らん

できています。陰では日本が破たんするなどとも言われているようですので、自分の大切な物を身近に置くということをもっと強く一般の方々に案内するというのも1つの考え方ではないでしょうか。

C いろいろな話や考えが出てきましたが、家庭用の金庫でも現金を手元に置かないということや、1度購入すればずっと使えるという認識から伸び悩みの部分があります。金融機関の貸金庫が普及してきているという状況もある中、東日本大震災の際に漂流金庫の件で脚光を浴びたということもあり、なくなることは絶対にない業界、産業だと思っています。

業務用に関してもペーパーレスでデータの時代になつてきていますが、紙や記録媒体など物理的な媒体というのは必ずあるはずで、小型化していく傾向はあるでしょうが、そのような重要なデータを記録した媒体を保管・管理するための金庫は今後も必要とされるはずです。

業界から「守る」をテーマに、大小を網羅した提案を

統計の推移を見ると、最も多い時には年間25万台、金額にして100億円以上の販売があった。昨年の統計では、約11万台64億円と最も良かった頃から大幅に落ちている。7～8年前をピークにして下降傾向にあったが、ここ数年間はピーク時の3～4割程度の数字で安定しているような状況。販売台数・金額が大幅に向上することは難しい状況下といえる。

司会 総じて金庫を取り巻く環境はネガティブな傾向にあるようですが、セキュリティの中で金庫を考えていくかは、今後の重要な切り口だと思います。業界としてはどのような考え方をしていけばよいのか、ポイントをお聞きたいと思います。

C 単体売りということからシステムとして考えていく時代になっているのは間違いないことです。「A」という製品を1つだけ売るのではなく、それに「B」と「C」を付加していく。お客様のニーズも多種多様化してきているので、その多種多様なニーズに沿うようにカスタマイズしたものをいかにコストを抑えて作り上げるか。お客様の要望に沿ったそれぞれのシステムとして提供できるかがポイントではないかと思います。

E 現状では金庫単体を多く取り扱っていますが、I

CTのインフラがこれだけ整ってきているので、それらを金庫の管理に取り入れることを考えたいですね。チェーン展開している店舗などの金庫または金銭等の保管庫を、本部などで一括して管理できないかということです。このようなニーズは、管理ソフトを含めて今後は増えていくでしょう。

F 皆さんの話を聞いてこれから先のことを考えてみると、従来からの金庫だけではなく、いろいろな金庫というものが必要になりそうですね。話がそれてしまいますが、銀行の金庫室のスペースが増えているような気がするのですが、実際はどのような状況ですか。

C 実際には減っています。金融機関の店舗は接客カウンターを境にして、行員が業務を処理するスペースの営業室と、ロビーなどお客様が利用される外側のフロント部分に分けて考えます。金庫室は営業室に属します。今、金融機関では営業室のスペースよりもフロント部分のスペースを広くしようという動きが全体の流れとしてあります。

F そうですか……貸金庫を含めて増えているという

わけではないのですか。

C いえ、貸金庫のスペースはサービスを行う側の部分なので、フロント部分に分類されています。店舗を総合店舗ではなく、特化型や個人店舗など金融機関もいろいろな形態で展開していますし、出店しても採算が合わないような場合には撤退と、金融機関でも出店・廃店のサイクルが早くなっています。そのため金庫室を持たない店舗も増えています。

この流れを逆から見た発想として、金庫室に代わる耐火・防盜の機能を持った壁面収納などという製品も市場には出てきています。

F なるほど……そういうことであれば、物を保管するだけの金庫は減っていくのでしょうね。そう考えると、もつと大きな枠組みの中でセキュリティを、業界として考えていく必要がありますね。

また、大手企業などを中心に東日本大震災以降、災害に対しての備えを重視する傾向が強くなっています。地震や火災などからどのように会社を守るのか、会社にとつて重要な物をどう守るのか。これはとても大きなテーマになってきています。ここをもつと掘り下げ

ることによってビジネスチャンスが広がるのではないのでしょうか。このテーマに対して、業界としてもつと積極的に取り組む必要があると思います。

現在198社が日セフ連に加盟。大阪セーフ88年、中部セーフが76年、東京セーフは68年、中国セーフ51年、最後に発足した九州セーフが25年と、各地区組合の長い歴史がある。そして連合会が50年を迎えようとしている。地区組合がしっかりとしているということは、それぞれの組合企業がしっかりとした基盤を持ち、世代の受け継ぎもきちんとしてきていることの表れ。

司会 後ろを振り返ると素晴らしい実績と業績が残っていますが、これから前を見るとクリアな視界が保たれているとは言えない部分がありそうですね。



サガワ・稲川

今後の展望を図るためにシステム化をしていくというのも1つの策だと思いますが、成熟化と言われている金庫産業の前を見ていくためにはどのようなことを



していくべきなのでしょう。

C 諸先輩方は金庫単体を主体に、業界としての基盤をしっかりと作ってこられました。当社の現況では金庫は全体の1/10程度となります。この数字からもやはりトータルセキュリティ分野やプランニング事業など、物を売るだけではなくサービスを売ることを柱にして他社との差別化、差異化を図っていかねばなりません。同じことをやっていたのでは成長はできません。例えば、2011年の3月11日以降、BCPへの対策が題材としてあります。水が押し寄せたり山が崩れたりして電気が寸断された緊急事態の際に、バックアップのシステムや体制をどのようにしていくのかというような場合、インフラを含めて考えていかなければなりません。このように災害セキュリティをトータルで発想していくと、自社だけの力ではどうにもできない部分がでてきてしまいます。

災害への対策だけでなく、金庫を含めたセキュリティ機器をトータルでシステム化していくような場合、特に自社だけの力ではどうにもできない部分が生じてきます。企業として成長していかな

今後も安心を含め、安全の提供が最重要

ければなりませんので、協業やM & Aによって力を補っていくという時代がもう目の前に来ているのではないかと思います。

D やはり我々の業界にとつて、安心も含めた安全を提供していくということが最優先かつ最も重要なことです。システムを販売するほどの実力はまだありませんが、以前から災害、中でも地震に対しては力を入れて取り組んでいるので、その中で金庫をどうにか位置づけられないかということを考えています。具体的には免震構などの中に取り込んで、躯体や設置方法以外での地震対策ということに関して考えています。

司会 今後を考えていく中で、いろいろな軸があると思いますが、社会的にグローバル化がどんどんと進んでいきます。金庫に関して海外での製造拠点やマーケット開拓などのグローバル化について、皆さんはどのようにお考えですか。

B 生産面に関しては、アジアでも人件費が上がってきています。今までは海外で生産することでコストが抑えられるということがありましたが、今後は生産す

る現地での人件費を含むコストを考えなければなりません。一般の製造業と同様に、金庫の製造拠点も中国からタイへと移り、今はベトナムへと人件費の安い地域に拠点を持っていく流れがあります。金庫の場合、現地メーカーの製造拠点があるかどうかがとても重要です。最初の一步から技術指導をして、生産につなげていくのはとても難しいようです。

G 当社の場合は国内での自社生産に重きを置いているので、全てを海外でということは考えにくいですね。輸出の多い事業では、輸送費などのコストを考えると海外に生産拠点を作るなどしていますが、金庫の輸出というのは現状では考えられませんので、海外で生産するということはまずないと言えます。

E 会社としてのマンパワーの配分を考えると、現状では全くその考えはないというか、できません。完全な国内生産品の原価率は高くなっているため、海外生産品に負けたりにしていますが、現段階では海外に生産拠点を作るという考えはありません。あくまでも国内生産にこだわって、手作り感覚を活かして良いものを作っていきたいという考えを持っています。今後もこの

考えを継承していくと思います。

C 海外では以前、シンガポールでも生産を行っていましたが、今は全く海外で製造はしていません。販売に関しては、数年前に販社として中国に進出するプロジェクトがあり調査を進めました。現在はそのプロジェクトは凍結しています。凍結してはいるものの、検討は続けています。生産拠点に関しては全く考えていません。

A 金庫に関しての海外展開は考えていません。ただここ数年、オフィス製品の方で多少、アジア地域での現地生産と販売が動き始めているという状況です。

金庫以外の分野では、業界の自主規格として金庫設備に向けた金庫設備規格を平成23年に制定し、現在、組合員の3社が製品展開をしている。文化財収蔵関連の扉や金庫室などに向けた、日セフ連の規格認定品が着実に増えている。認定製品はホームページに掲載している。また、日本の文化財収蔵庫に関してのガイドライン作成にも取り掛かった。

司会 今後は金庫設備に加えて、文化設備に関する扉や壁に関する規格も動き始めています。これらは新し

い切り口になっていくのではないかと考えていますが、このような方面の動きへのご意見をお聞かせください。

C 金融機関の金庫室が減ってきているという現状もありますが、これも完全にはなくなることはない分野だと思います。テナント形態ではない店舗の場合には、金庫室を作るというケースが考えられますので。しかし、金融機関の統廃合という問題もありますし、金融機関以外で金庫設備はなかなか設置されないという状況もあります。また、床の耐荷重という問題があるので、テナント形態の店舗で展開していくのは厳しいという事情もあります。

何か新素材などを転用できるならば、新たな展開が見えてくると思います。

D 文化施設関係で必ず必要になるというのですが、大量に出るものではありません。だからと言



エーコー・近藤

異なる側面からの視点でPR、開発を

ってなくなるものでもないので、文化財に関連したトータルの中の1つとして捉えています。

司会 また少し違った側面的な発想となりますが、金庫＝金銭という財産を守るという発想ではなく、かけがえないものを残すためには最後は金庫しかないと感じています。豊かな時代になりいろいろなものが入るようになりましたが、現存する唯一のものは、かけがえないものを残したいというのは、人間の基本的な欲望として必ず残っていくと思います。家族の思い出のセピア色になった写真や遺言書、何代も続いている家系ならばそれを記した家系図など、後世に残すために安全に保管するには2つの方法がありますよね。1つは金融機関の貸金庫。しかし、自分の手元に置いて保管するには金庫がありません。

違う側面から見ると、金庫は1つの「文化」と言えるのではないのでしょうか。このような違った視点から見て、個人のお客様に対してPRしていく方法もあるのではないのでしょうか。また、製品の開発でも今までと違った側面から見ることで、金庫の本分である「守る」ということに対して何か新しいイメージが浮かんだきたりしないのでしょうか。

C そう考えていくと、50年後には金庫の定義が変わっているかもしれませんね。

F 今、言われたのは個人に向けてということですね。そうすると業務用とそうでないもの、分けて考えていくべきではないかという気がします。業務用でないものは、そういう人間の欲望がある限りは、形や機能は変わるが残っていくのではないのでしょうか。

B 実はネットなどで安く売られている金庫のほとんどがダイヤル式です。それを知らないで安いからと購入したものの、開けられないという高齢者の方からの相談がとて多くなっています。その対策を考えていく必要はあると思います。安く売ればよいというのはなく、高齢者に向けては開けやすいというのも1つの付加価値になるのではないのでしょうか。

司会 日本の社会には高齢化という避けられない課題がありますね。ダイヤル式ではなく、高齢者でも鍵は開けやすいが安心・安全も確保された、指紋認証や静脈認証、顔認証などの生体認証が個人向けの金庫に導入されていくようになっていくのでしょうか。

業界全体で新発想のビジネスを

B メーカーとしては、ユーザビリティに優れた生体認証を個人用の金庫に搭載することを考えたいところですが……まずはコストという難関があります。それに高齢者でも登録が簡単にできて、開ける時には簡単に開けられる。しかし、ほかの人には簡単に開けられないという技術的なジレンマもあります。鍵ならば簡単に開けられますが、鍵を失くしてしまうということもあるので、何が最適なのかを今、探っています。



日本アイ・エス・ケイ・土井

司会 高齢化に対してはキースだったたり、マグネットを利用して鍵をかざすと解錠するシステムがありますが、いかに簡単に特定した個人が解錠できるかということが重要ですね。

B マグネットを利用したシステムは、鍵も大きいの

で高齢者に向いているかもしれませんね。

それと、商品開発をしていくうえで、遺言はキーになると思います。今までは中に入れる物の位置づけがはつきりしていなかったもので、自分には入れるものは何もないという言葉が多く聞かれました。そういう言葉に対して、遺言状や自分の思い出など、亡くなった時にそこに全て入っているという提案ができると思います。

ところで、アベノミクスによって何百万円もする高級時計など宝飾品が売れているようですが、このような高級品やブランド品を一般の方々はどうのように収納・保管しているのでしょうか。そういう物を入れられる保管庫や金庫を提案していく、というのも1つの道ではないかと思うのですが……。

F 個人の宝やかけがえないものを安全な場所に保管しておきたいが、費用面、サイズ等で、銀行の貸金庫には預けたくないと思っている人はたくさんいるのではないのでしょうか。個人では将来的にお墓を管理できないと考える人が、遺骨等の管理を有料で預かってくれるお寺に変更する人が増えていると聞きます。また、BCPの視点から、免震機能を持った安全性の高



イトーキ・塩谷

いサーバー専用のビルでサーバーを管理してもらうケースも増えています。

セキュリティという視点から考えるとまだまだ色々ありそうです、業界で新しい市場を創造し、作っていくというのはどうでしょう。例えば、セキュリティに優れた建物で個人の永遠に残したいかけがえのないものを有料で預かるビジネスです。

新潟県燕三条の魔法瓶を作っている小さな会社が、技術革新を起こしました。チタンを材料とした二重構造のグラスを作りました。水割りを一晩放置しておいても氷が溶けないのです。金庫業界にも技術革新が必

要だと考えます。今までの常識は持つて逃げられないようにと重い金庫の中に大切な物を保管していました。耐火性に優れ、しかも持ち運びに便利な軽い収納箱があれば、耐火金庫室はなくても、銀行の貸金庫の様なしつ

かりとした管理ができれば、貸金庫で預かれない、もしくは貸金庫を使わない人のための、個人の大切な物を預かるビジネスが考えられませんか。当然、業界全体で技術の構築や国・自治体の支援を受けることが重用だと思います。

司会 似たような取り組みとして以前、金融機関向けの貸金庫を一般用に販売したことがありました。民間企業による自動貸金庫業です。結局は利益が出ずに失敗となりました。この失敗をベースに今の発想を考えてみると、民間企業単体による営利目的ではなく国や自治体と関連したポジションに持っていけないと継続しませんね。

自社の利己的な発想ではなく、国や自治体を取り込んで、国民個人の大切な物を守るために業界が何かお手伝いできないか、というところに結び付けていければ、今までにない発想が生まれてきそうですね。

F 国や自治体を取り込むことで、使う人にも安心感を与えられます。

C その話は運用なども含めての話ですが、50年後は

市場確保に各社協力し合える体制も

間違いなく規格なども変わっていると思います。水と安全はタダと言われていた時代はもう終わっていて、20年くらい前はお茶や水を買う人はいみせんでしたが、今は当たり前のように買い、売れている時代です。そう考えると安全に関して、今後もっと変化が生じているでしょう。

E 金庫というと、現金や有価証券など個人の財産を保管するというイメージがあります。業務用を主軸としている当社としては、オフィスでの重要書類や個人情報関係の書類などを収納する耐火金庫というのが発想のメインとなります。金庫という概念とは別に、企業にとって重要なものや管理しなければならぬもの、紛失してはいけないものを保管、守るという考え方で、金庫に捉われずお客様のニーズに合わせたモノづくりを展開しています。この考え方を発展させて、今までの耐火金庫以外の部分に力を広げていくという方向性もあると考えています。すでに耐火金庫ではない発想の商品開発をいろいろと取り組んでいます。

また生体認証と金庫を連動したシステムに関しても、お客様からの問い合わせが増えていますので、生体認証と耐火金庫だけではなく、お客様が必要とする保管

に関するあらゆるものへの対応を手掛けていきたいと考えています。

司会 なかなか活発な発想、意見が聞かれるようになりました。ではここで、次の50年に向けて金庫業界はどのような業界になっているかをお聞きしたいと思います。忌憚のないご意見をどうぞ。

H どちらかといえばニッチな産業の業界なので、そういう意味では大きな企業体が侵食してこないという傾向がありました。大きな企業が入ってきたとしても、歴史に培われた経験を活かしてしぶとく事業を続けているでしょう。

司会 世界的に見て、さまざまな規格がISOの規格へと統合されてきている傾向があります。もし、EL規格やUL規格などがISO規格として置き換えられた場合には、日セフ連の業界規格やJIS規格もそれに対応したものになければなりません。今のところはヨーロッパの規格がそこまではいいと思いますが、世界的な流れとしてはその方向にあるようです。技術委員会では、その整合性を先んじて調査を行っています

す。これは、グローバル化に先鞭をつけながらやっていくという、連合会としての1つの姿勢です。

B これは我々の業界に限ったことではありませんが、人口も減少しているのでグローバル化を果たしていないといけないでしょうね。

F 先日ある月刊誌で20年後に4大新聞社がどうなっているかということが掲載されていました。互いに競争し合った結果、残っている新聞社はなくネット新聞に変わっているという結論でした。



金剛・田村

それはなぜか……

新聞社は新聞配達などをそれぞれ個別に行っていて、協力してできることを行っていない、今後も行いそうもないことから、コスト高で共倒れになるというシナリオで書かれていました。金庫業界でも、

協力し合えるところは互いに協力していく必要があるのではないのでしょうか。

C グローバル化に向かうのでも、国内の市場を確保するのでも、業界の各社が協力し合える部分では手を取り合っていかなければということですね。確かにヨーロッパの自動車業界では、プラットフォームや部品の共有化、協同での開発などが行われているようです。日本の流通業界でもデパートなどでは、配送を共同で行うというのがあります。そういう業界になつていければという、希望を含めた想いがあります。

新聞社以外にも淘汰されていく産業が、将来的には出てくる可能性はとても高いでしょう。移り変わりの早い時代でもあり、ICTをはじめとした技術が目まぐるしく変わっている中、業界一丸となって知恵を絞って臨んでいかないといけないということですね。

司会 これから産業としての生き残りをかけていくには、業界各社が協力し合っていくという発想も必要になる時代がくると思います。セキュリティとは非常に広い意味を持つ言葉です。その中で業界として、企業として携わっているわけですが、50年後の日セフ連は

どうあるべきかを座談会の最後にあたって一言頂きたいと思っています。

C 日セフ連が業界の先頭に立ち、グローバル化に向けてリードをしてもらいたい。例えばA社とB社のある部分での業務提携などをリードしていけるような組織になつてもらいたいと思います。

B 貿易担当の部署と話をしていると、産油国が多く集まる地域では「メード・イン・ジャパン」の製品が欲しいと未だに言っているとのこと。中国でもなく、アメリカでもヨーロッパでもなく、メード・イン・ジャパンが欲しいと。それだけ日本製品を信頼しているということの証しだと思います。このように小さなことでもよいので、各社からの情報を集め業界団体としてグローバルで市場を開拓できるような視野や、



事務局・中村

海外とのコンタクトをとっていきけるような行動をしてもらいたいですね。そのような連合会の姿のもとで、組合に加入している各社はメード・イン・ジャパンとしてグローバル市場に出しても何もひけをとらない、その冠に見合う製品を提供できる業界、企業になつていられればと思います。

A 成熟した市場の中で、各社が歯を食いしばって耐えているという姿勢が現状だと思います。先を見越したときにも明るい要素は決して多くはありません。また、各社中小規模の業態でやっているの、個々で海外の市場開拓や生産拠点など大きな視野での展開には難しいものがあると思います。そこを業界各社一丸となつて展開を考えていこう、行動していこうという時の大きな動きを先導できるような連合会であつてほしいと思います。

E どのような業界にしていきたいかと考えると、企画員会を筆頭に各委員会がありますが、各委員会で見られる提案をもつという世の中に仕掛けていけるような組織体になつて欲しいですね。例えば金庫診断士は、今は組合員の人しか受験できないようになって

大きな動きを先導していく姿を連合会に望む

ていますが、その資格受験者の枠をもっと広げて金庫のことを知ってもらうための仕掛けとなるような、そのためには診断士の資格を取ろうと意欲が湧く魅力的な資格でないとならないので、日セフ連自体が魅力あるような組合、いろいろな組合以外の方にも認知してもらええる団体になってほしいと思います。

F 組合各社にとつて頼りがいのある連合会であつてほしいと思います。50年を迎えた今でも業界を引っ張つてもらっていますが、ぜひ50年後もそうであることを願っています。

G グローバル化、国や自治体と連携してという話が先ほど出ましたが、それにプラスして例えば保険業界など、UL規格のような保険の利率にかかわるような仕組みを作ったり、もう少し仕組みの確立に向けた企画を連合会で画策していけないものでしょうか。各委員会というよりも、金庫業界の上層部の集まりとして、そういった仕組みづくりというところに取り組んでいけるような組合であつてほしいと思っています。

D 改めてこれまでの日セフ連の歩みを見ると、日セ

フ連なくては解決できない課題、1社だけでは解決できなかったことがありました。特にJIS規格や金庫の耐用年数20年ということもそうですが、業界としてまとめて頂いたお陰で、組合各社が共通の認識を持つことができたと思います。正直なところ50年後がどうなっているかは全く想像が付きませんが、解決すべき課題が日セフ連に集まり、そのまとめ役として存在してもらいたいと思います。

司会 皆さん、本日はありがとうございました。

*

大元素を守る金庫のこれから

東京理科大学総合研究機構 教授 菅原進一

プロローグ

古代中国の思想によれば、万物を構成する五大元素は木・火・土・金・水であり、これらの存在を知覚させる陰陽と融合して、生活の場が選ばれ暮らしの暦がつくられるという。人が創り出せない希少な金は貴重な基本元素として認められ、今日でも暮らしの中心的存在であり、これを保管する容れ物としての金庫の役割は極めて大きいものがある。経済活動が広がるにつれて紙幣が幅を利かせ金本位制への関心は薄れているように思われるが、金は究極の拠り所として変わらない人気がある。また、時を経て金のほかにも宝石・貴金属・公文書原本・証書類・電子

記憶媒体など生活や業務に欠かせない物品の保管は益々重要になっている。また、金の認識範囲も広がり通貨全体をお金(money)と呼び拌んでいる。猿(monkey)からkの字を抜くとマネーになるのも意味深であり、映画「猿の惑星」が想い出される。

金行はなく銀行がある

人間生活と密接な関係にある地理学的元素とされる金は、金属貨幣の軸としてその価値が高まっていた。ローマ帝国では金銀本位制が布かれ、兵士の給与は鑄造された銀貨幣で、大量の銀が必要とされたため高額通貨としての金貨、低額通貨としての銅貨も普及していった。日本では、大規模で広範囲に金融活動を行

う機関を銀行、小規模で地域に密着するか、あるいは特定目的の範囲で金融活動を行う機関を信用・労働・農林金庫などと呼び、金行がないのは面白い。語呂も悪く感じられるが…。

金の納めどころ

また、金などの貴重品を収納するものは、建物・室・箱など事情に応じてサイズが異なるが、大切なものを入れるだけに、火災・盗難・湿気などから防護される性能を有することが、これほど重要視されている例は少ない。これらの入れ物について、人々は様々な収納方法を考えてきた。西欧では壁に金庫を埋め込む例もある。優に40、50 cmはある石やレンガ

づくりの壁を利用した例であり、ヨーロッパのホテルで案内の葉には書いてあるが、実際に部屋の金庫がどこにあるかわからず、フロントに聞いて壁にあることが分かり驚くことがある。日本人は、金庫は箱として置いてあることが先入観となっているためである。このことに関してフランスには面白い小噺がある。小人がアパートの境壁に住んでいて両隣の家のお話に耳を傾け、両家にちよっかいを出し騒動のタネを蒔く悪戯をするというものである。また、高度成長期には全国津々浦々に銀行や金庫が支店を出したが、盗難も頻発した。おこし（粗糲）のような軽量コンクリートの壁でボールでも容易に削り穴を開けられたためである。コンクリートというので金庫室になると思い込んでいた盲点を突かれた話である。現在は、中に鉄板を入れていると聞く。

地下に安心金庫

大火が頻発する江戸時代、大店では床

下に穴蔵を造って大福帳など重要なものを素早く納められるようにしていた。店の大福帳は取っ手の付いた箱に入れて棚に並べ、火事の時に番頭や丁稚たちが床蓋を外してそれらの箱を穴蔵へ運び込み、入り口に蓋をして土を被せておき、たとえ店が焼け落ちても商売道具の重要品は焼失を免れる策であった。日本木造は壁が薄く容易に燃え抜けてしまうため、当然ながら物を納める場所とする認識はなかった。その代り地下は周囲を土に囲ま

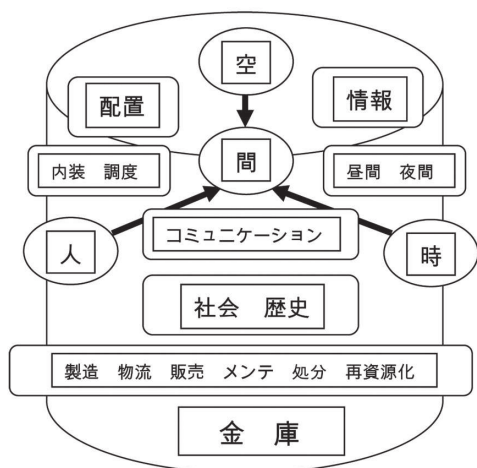


図1. 金庫の開発は「間」の思考から

れ入り口部分の防火に配慮すれば比較的低コストで金庫まがいのものが造れた訳である。ただし、一般的に商業が盛んな地域は、経済活動に便利な大河川の河口域に展開したため軟弱地盤で地下水位が高い所が多く、防水や防食に注意する必要がある、水に強い松や檜葉が使われ目地部分には木の皮が詰められた。火事で収納物が焼損した例では、蓋の上に被せた土の量が少なく散水も不十分であったためという。現在の金庫でも天地や側部に入れる断熱材の性能が重要な役割を持っていると考えられる。

金庫の性能コンセプト

資産大国アメリカでは、早くから貴重品を収納する施設や金庫の性能に関する考え方や技術の開発が進められてきた。

連邦調達局 (GSA: General Service Administration) では、伝統的な文献である1963年発行のゲージ・バブコック社の図書館と収納図書防護対策及び文

書電子化の新傾向を鑑みて、「連邦の記録センターや記録保存館の防火対策に関する文書」を1977年に発刊している。ここで注目すべき観点は、貴重な文書や記録と同時に従事者の生命を守ることの重要性を述べていることである。そのため収納文書等は必ず複製をつくり、別の場所に保管しておき、特にかげがえのないものは厳密な保存法を採り、普通文書とは分けておくこと。大量の文書を保存しておく場合は、ストック自身が火災発生の原因となる場合があることを示唆するなど、貴重品保存の基本的な原則が考察されている。

金庫の性能試験の略史

また、1894年設立のアメリカ保険試験所 (UL: Underwriter's Laboratory of America) 規格は、工業製品の安全・安心 (safety&security) に関するさまざまな耐火試験方法などを定めたものとして著名で、多くの公的機関や企業に活用され、

対象となる標準火災温度は843～1093度の領域である。これは標準的な火災室の経時的温度上昇では約30～180分の範囲である。その350級 (Class 350) では、30/60/120分間加熱した後の自

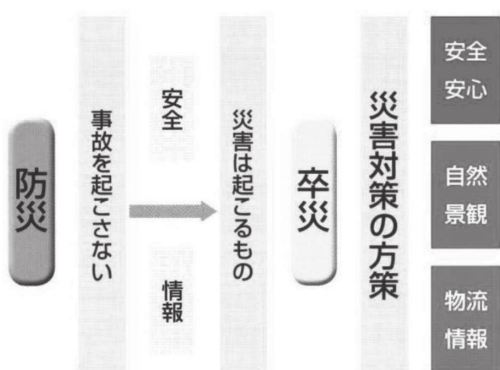


図2. 防災から卒災へ—これからのsafe

然放冷後の内部温度が177度以下に保たれる金庫は、紙類の保管に適している等と規定されている。また、1090度の中で30分間加熱した後の使用可能性をチェックするExplosion Hazard Testが

20～60分間加熱後に高さ9・1mから瓦礫の上に落下させ、さらに20～60分まで加熱して収納物の健全性を検証するFire Impact Testなども規格化されている。日本では1966年に耐火庫とキャビネットのJIS規格が制定され、1981年に磁気DCなどを収納する金庫の規格が追加された。1995年の阪神・淡路大震災における金庫被害を教訓に耐火耐衝撃性が検討され、1998年にJIS規格が改正され、UL規格との整合化が図られた。2006年には、耐火金庫に破壊防盜性を加えた業界規格TS-15がつけられJISに追加された。2013年には規格内容充実を目的に、型式・受渡検査項目を規定するなどの改定がなされた。

エピソード

建築を構成する基本要素は、空間・人間・時間であり、すべてに「間」が関わっていることが重要であり、これからの金庫の開発や使用は「間」を考えて進め

る必要がある。間取りは室空間を適切に配置する（空気を区切る）ことであり、住み手の行動（動線）を快適にする計画は避難上も優れている。金庫の配置と内外部域の動線との関係を考慮することは、防盜性の向上にも有効でありバリアフリーとの相反課題である。人相互のコミュニケーション力、すなわち人—間—人の絆を高めることによって少子高齢化に伴う社会の委縮化を回避する必要性が高まり、金庫市場でも関係者のFace-to-Faceの交渉力や開錠方法の簡易アクセス化などによって、普及率の向上に繋げる試みが必要だと聞くと聞くと。こうした活動には時間が重要なファクターとして関わっている。過去—現在—未来という、時—間—時の流れに鋭く反応することから金庫はさらなる発展を遂げていくであろう。貴重品を入れる金庫は、建築と類似した設計計画で備えられるという見方もできる。場合によっては作り付け家具と同様に扱えば室内がスッキリする。ワインセラー、

ウォークインクローゼットなど収納関係と融合した機能を考察することも面白い。軽い金庫でもセキユリテイ機能を強化すれば防盜性が向上する。これからは情報密度が一層高速・高密度化する一方で、保管媒体の思わぬ脆弱性も露呈するリスクも考慮しておく必要がある、金庫の内部環境を24時間自動的に管理するシステム、保管品の劣化防止、合理的な複製及びシステムの構築、防災センサーと連動した開錠機能のさらなる開発など検討課題は少なくないと思われる。図1は、「間」をキーワードとしてこれからの金庫の開発コンセプトを示したものである。また、図2では、昨今の防災減災の動きに一石を投じたもので、卒災思考の大切さを提示した。防災は技術的に安全化を図ることを意味し、「安全第一」などのスローガンが掲げられるが、破綻すると想定外との弁明が免罪符となる。しかし、卒災は「災害は起こるもの」との認識で、協働して災害に俯瞰的に対処することを

意味している。俯瞰的ということは、卒災思考の構成要件を安全安心・自然景観・物流情報としていることに依る。東日本大震災では、約5700個の金庫が警察に届けられ、中にあった約23・7億円と財布やバッグの現金の合計約38億円の内、85%が持ち主に戻ったという。今後の金庫開発のあり方を考えた場合、プライバシー性の高い金庫を総合的視野及び国民性の違う諸外国へ輸出する場合の製品との調整について考える場合の参考になる事例である。日セフ連のこれからの発展を大いに期待したい。

菅原 進一

昭和45年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了。工学博士。同年建築研究所研究員。昭和49年東京大学工学部建築学科助教授。平成5年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授。平成15年東京理科大学総合研究機構教授、東京大学名誉教授、現在に至る。日本建築学会防火委員長、ISO/TC92火災安全専門委員会国内委員長などを歴任

オフィスのセキユリテイはこう進む

(株)日建設計 執行役員 山梨知彦

セキユリテイが重層化して、複雑化する

日々のオフィス設計の打ち合わせの中で、セキユリテイの重要性が高まっていることを実感している。

おそらくは、人間の基本的な繋がりが、コミュニティと呼ばれていた身体的に把握できるスケールであった時代から、インターネット上のネットワークに象徴されるようなヒューマンスケールを超えたものへと拡張する中で、必然的にセキユリテイが重要さを増しているからではなからうか。例えば、私自身の仕事のフィールドであるオフィス設計で考えてみても、かつてのオフィスではビルの規模も小さく、そこで働いている人も互いに顔見知

りであることから自然とセキユリテイが成立していた。オフィスのドアに鍵をかけてしまえば、あとは重要なものを金庫に入れておく程度で十分だった。セキユリテイはシンプルかつ直感的なものであった。

ところが、オフィスが大型になったり、そこに出入りする人が桁外れに増えはじめると、セキユリテイが対象とするもの自体が格段に増え始めた。オフィスのドアに鍵をかけたり、金庫に物をしまっただけでは満足できないとばかりに、エントランスにセキユリテイキーゲートが設けられたり、防犯カメラが設けられたりといった具合に、セキユリテイは重層化され始めた。またICTなどの発達により、

新たに電子情報など、金庫ではセキユリテイを保てないようなものが行き交うようになった。ますます対象が広がり複雑さを増したセキユリテイは、人間が直感的に理解できるものを超え始めてしまったような気さえする。

セキユリテイが直感から離れたブラックボックスになってしまった。現在はそんな時代である気がする。

建築と4つのフロー

普段、オフィスビルというハードウェアを設計している時に、僕は、そこを流れる、「人・コト・モノ・エネルギー」といった4つのフローを考える。

1つ目のフローは、人の流れ。最近で

は、「振る舞い」「ビヘイビア」などと呼ばれ、設計上の大きな関心となっている。建物は人間のためにつくられているのだから、当然といえば当然のことだが、とかく人間は本質を見失い、目の前にある課題だけを気にしがちだ。建物づくりでも、その畏にはまる設計者は多い。本質である人間の行動を忘れ、ついつい建築そのものを造ることに集中してしまうのだ。だから昨今、人間の振る舞いに着目し、設計を本質へと戻そうという動きがあるが、当たり前ながら忘れていた課題であり、大事なことだと言えるとと思う。

そして、今ここでテーマとしているセキュリティの基本が、ビルに出入りする人の制御に関わることであることから、この流れはセキュリティを考える上で、最重要の流れということになる。

2つ目のフローは、モノの流れ。オフィスビルに出入りするものは、何人も人間だけに限らないことは、少し考えてみればすぐにわかる。書類や商品、そして事務

機器やデスクなどのオフィス家具もモノの流れと言える。少し変わったところでは、更新のサイクルが建物の寿命に比べて短い設備機器なども、オフィスビルの中を流れるモノのフローとして捉えてよさそう。これらはセキュリティの視点からいえば、危険物の持ち込みや資産の盗難などに直結する、重要な流れと言えるだろう。

3つ目のフローは、エネルギーの流れ。環境のとなり、オフィスビルの設計の上では、エネルギーのフローは考慮せざるを得ない重要な流れの一つになっている。もちろん、建設費に比べ数倍になるといわれているビルの運営費の中でも極めて重要であるものの、セキュリティという視点ではこれまであまり語られることがなかった流れでもある。しかしながら売買電やスマートグリッドなどが今後進み、ビルが相互にエネルギーのやり取りをするようになることが予想されている以上、この流れも早晚、セキュリティの対象と

なるに違いない。

4つ目のフローは情報。言うまでもなく、インターネットに代表される電子情報のつながりは、今日のビジネスや生活に不可欠なものであり、オフィスビルの設計にあたっては、必ず考慮しなければならない流れとなった。セキュリティの観点から考えてみても、パソコンにセキュリティソフトがインストールされることが当たり前の時代となっていることから、この流れが重要な課題となっていることは明らかだろう。

オフィスビルの設計とは、内部と外部を分かつ境界を設定し、4つの流れの出入りをコントロールすることとも言える。ビル設計は本質的にセキュリティと表裏一体にあるとも言えるのだ。流れの出入りを抑えればビルはセキュアになるものの、コミュニケーションが阻害され、使いづらいものになりがちである。一方、流れを自由にしてしまえば、コミュニケーションは高まるものの、セキュアさが失

われ、信頼性に欠けるものとなつてしまふ。現代のオフィスビル設計とは、4つの流れのさじ加減を調整して、セキュアでありながら、コミュニケーションを阻害しないベストバランスを求めている作業とも位置づけられる。

実際に、現在のオフィスのセキュリティを、これら4つの流れ方から見てみると、個別の流れごとにはそれなりの対策が取られているものの、4つの流れを統合したスマートなセキュリティシステムが登場しているとはいいたい状況であろうか。人・コト・モノ・エネルギーの4つの流れを統合した「スマートセキュリティ」が今、必要だ。

機能性、関係性、象徴性を 併せ持ったセキュリティ

さらに別の視点から、オフィスのセキュリティを考えてみよう。

もう数年前になるが、セキュリティゲートの開発に関わらせて頂く機会があつた。

当時、ヨーロッパやアメリカの金融機関などではすでにゲートの採用が始まっていたが、日本の一般的なオフィスビルではセキュリティゲートを持つのは極めて稀で、高度なセキュリティが必要な研究所などでわずかに使用例がある程度状況であつた。そんな中、外資系企業の流入や日本企業のグローバル化が進み、同時多発的に複数のプロジェクトにおいてセキュリティゲート設置の検討が始まつた。

早速国産のゲートをチェックしてみたのだが、機能的には十分なものの、デザインが納得できない。一方で海外製品は、デザインは素敵なもの、メンテナンスなどサポートが弱く、機能的には満足がいかないという状況であつた。致し方なく、設計と施工期間を見計らい、新たに満足がいく製品を開発するしかないとの結論に至り、専門メーカーと開発を進めることになつた。

この過程で、セキュリティゲートをは

じめとしたセキュリティシステムの開発には、大きく「機能性」、「関係性」そして「象徴性」の3つの切り口からの考察が不可欠なことに気付いた。

1つ目は、セキュリティゲートとしての、機能的な問題である。これについては、日本のメーカーが最も得意とするところで、開閉スピードや信頼できる品質を誇っていることがすぐにわかつた。問題は、機能のみを金科玉条のように死守するあまり、ゲートが置かれる状況を全く顧みることなくデザインされていたり、逆にまったく機能とはかけ離れた「取って付けた」ようなデザインがなされていたりすることであつた。日本のセキュリティゲートによるセキュリティシステムは、「機能性」上の課題は乗り越えたものの、デザインのすり合わせが行われていない状態と言えそうだ。

2つ目は、本来セキュリティとはビル全体に及ぶトータルなシステムであり、システム全体との関係性の中でセキュリ



エントランスに溶け込んだ目立たないセキュリティゲートの例

ティゲートが位置づけられるべきものであるはず。ところが実際には、全体のシステムとは切り離された単独のものとして存在しているという事実がある。たとえば、ビル全体のシステムと連動させることができれば、ビルへの入館をオンオフするのみならず、朝の出勤時の特定エレベーターへの集中を低減するなど、人の流れ自体をコントロールできる可能性がある。現状のセキュリティゲートは、ビル全体のシステムとの「関係性」が練られたものとなっていない。これはセキュリティゲートメーカーのみならず、全体の設計を取りまとめる我々建築家にも大きな責任があるところだ。

3つ目は、セキュリティゲートが放つ意味の問題だ。元来セキュリティとは、機能的な問題

以上に象徴的な意味が大きい。例えば、機能を超えて堂々とした門を設けたり、必要以上に目立つように防犯カメラを付けたりするもの、セキュリティが機能性を超えた意味、すなわち象徴性を持つことに由来する。このICTの時代になっても、重要書類は金庫に保管されなければならぬのだ。銀行などでは、必要以上にセキュアを目立たせる必要がある一方で、逆にIT企業などでは、さりげなく目立たせない、逆の象徴性を求められることもある。

オフィスビルにセキュリティが持ち込まれて日が浅い日本では、クライアントと設計者による、セキュリティシステムが持つ、機能性とは切り離された象徴的な意味合いに関わるすり合わせが不十分であることがしばしばある。加えて、メーカー側のセキュリティ機器類のデザインラインナップが、期待される象徴性を担うには、いかにも中途半端なものが多いと言わざるを得ないのが現状ではなから

うか。

セキユリテイゲートをはじめとしたセキユリテイ機器のデザインの向上のためには、機器が担うべき象徴性についての、クライアント、設計者、メーカー間のすり合わせが必要だ。

乏しい経験からのゆがんだ見方かもしれないが、日本のセキユリテイシステムは、「機能性」は満足いくものの、ビル全体システムとの「関係性」と、デザインが担うべき「象徴性」の側面について、未成熟な状況にあると言えるのではなからうか。

スマートセキユリテイと自由の共存

セキユリテイから一步視点を広げ、人、モノ、コト、そしてエネルギーの流動のコントロールという点から見れば、日本のコントロールシステムは、総じてよく発展し、普及しているように思われる。今後はこの状況を生かし、

①セキユリテイの概念を、人、モノ、コ

ト、エネルギーのフローのコントロールへと拡張していく

②コントロールの対象を、人のみならず、モノ、コト、エネルギーへと広げ、さらに相互の連動を図っていく

③コントロールを機能性のみならず、関係性や、象徴性の切り口から捉え、デザインする

④それらを連動させて、統合させるカギとなるのはICT技術である

以上が、課題になりそうだと私は考えている。これらの課題を解決したものが、今後発展を続けていくであろうアジアや中東諸国、さらにはアフリカ地域などへ、人、モノ、コト、エネルギー制御によるトータルなビル、そして都市のマネジメントシステムを展開できる可能性を持つはずだ。

例えば、東京オリンピックにおける大量人員コントロールを例にとれば、次のような夢が描けるかもしれない。

S u i c a や P A S M O といったマス

トラ系のカードシステム、スマートフォン、乗換案内アプリケーションの普及率を考えれば、入場チケットとカードシステムを連動させた新しい人員流動コントロールも夢ではなさそうだ。乗換案内アプリによって、指定ルート、指定時間でオリンピック会場へ来た者に対して、チケット代の一部払い戻しのようなインセンティブを与えることで、ハードウェアのインフラを補強することなしに、大量の人員の流動を制御できそうだ。事前情報登録と顔認証システムを連動させれば、事前に持病を登録することで、主催者はそのリスク保持者の動向を容易に管理できるかもしれない。さらに不審行動者センシング技術などを連動させれば、迷子の早期発見や保護者への連絡なども格段に容易となる。大規模人員のコントロールのリスクを、あからさまには見えないソフトな方法で低減し、かつそれに要するハードウェア的投資が大幅に低減できる可能性がある。

もちろん、すべてが連動した「人、モノ、コト、エネルギー」の連動コントロールシステムが、人々が気付かないところで大量の人員をコントロールできる状況下では、どこまでの制御が許されるかなど新たな倫理的問題も生じるかもしれない。私自身は、その倫理観の解決とい

う課題が、セキュリティからコントロールへと進化したものを、個々人の自由意志をも統合して自律的なバランス制御を行う「マス・カスタマイズド」なシステムへと、さらなる進化をさせることを信じて、この方向への発展を期待している。

山梨知彦

昭和59年東京藝術大学卒業。昭和61年東京大学都市工学科修士課程修了。同年、㈱日建設計に入社。現在、執行役員・設計部門代表兼デジタルデザイン室長。
主な担当プロジェクト／木材会館(MIP-ASIA)、ホキ美術館(日本建築大賞、BCS賞)、NBF大崎ビル(旧ソニーシティ大崎)、ラゾーナ川崎東芝ビルなど